88
327

始

88-327/1

浦谷熊吉著

教育適用

理論心理百話

東京 弘道館發行

大正
4. 6. 10
内交

序

俚諺は一家の言説と異れり。多數民心の境に觸れて感動したる所、自然に匯集して辭となり、終に相傳へて人口に膾炙する所となりたるもの是なり。故に俚諺は民族精神の小照なり。其の言卑朴と雖も、能く世情民心の微を映す。民族心理の研究に志す者、亦資料を玆に採るを要す。然れども其の措辭簡に過ぎ、往々にして理義の解すべからざるものあるを憾とす。

友人浦谷君、近頃俚諺一百種を集め、註釋を施して一冊子とな

序

古來我邦に行はれ來りたる俚諺にして、強く國民思想を支配し、道德風敎の上に至大の關係を有するもの、決して少しとせず。

今其中より、特に心理的說明を施すの價値あり、又必要ありと認めたるもの、殆ど九十種を選び、外に正夢、誤解、氣合等、約十種の事項を加へて以て、百種となし、之に一々通俗なる心理的說明を施したるもの、即ち本書なり。

世の青年子女が處世上の一助となり、又父母敎師が敎育上の

し、名けて心理百話と稱す。說明簡易にして要を攝し、一讀して俚諺の理義明解すべし。蓋し民族心理研究の一助として世を益するものあらん。浦谷君の言に曰はく、是れ唯通俗心理的解釋のみ。若し夫れ嚴正なる心理學的解釋に至りては、亦他日を期して世に問ふ所あらんとすと。余固より君の斯學に淺からざる心あるを知る。今此の言を聞きて、君が期する所の空からざるべきを信ず。心理百話の稿成るに及び、更に望を將來に屬して此の序を贈る。

明治四十二年九月一日

文學博士　福來友吉識

參考ともならば、豈、啻に著者の幸とのみ云はんや。

明治四十二年八月廿五日

浦谷熊吉識

又序

吾人の日常生活に於て、其行動云爲を事實上能く規律し支配するものは、千萬言の倫理學說や數百語の訓誡にあらずして、寧ろ片言隻語の格言又は俚諺なり。就中、俚諺は根柢を國民性の上に置くものなれば其力最も强し。然れども、語簡に過ぎ辭足らざる所ありて、眞意の存する所を解するに苦ましむることなしとせず。是れ余の敢て心理的解釋を試みたる所以なり。

本書は、早くより通俗教育圖書として文部省の認定する所と

なり、旁々二三改刪を要する所ありたれば、今度之を再版するに當り尙ほ數十種の增補を爲し且つ多く修正を加へたり。幸に世の父母敎育者及び靑年子女の、更に益〻要求する所とならば、正に余が望蜀の欲を充たすに庶幾からんか。

大正四年五月二十五日

浦谷熊吉識

敎育適用

俚諺心理百話

目次

○あの部
一　案じるより生むが安い……一
二　あまり選んで糞にぎる……三
○いの部
三　言はぬは言ふにまさる……五
四　言ふは易く行ふは難し……六
五　一に看病二に藥……八
六　祈らずとても神や守らん……一〇
七　一事が萬事……一二
八　一犬虛を吠ゆれば萬犬實を傳ふ……一四
九　一匹の馬が狂へば千匹の馬

目次

が狂ふ……一五

○うの部

十 噂をすれば影とやら……一七
十一 〃疑つては思案に能はず……一八
十二 賣言葉に買言葉……二〇
十三 内への善い人外へが悪い……二一

○えの部

十四 縁起がよい悪い……二三

○おの部

十五 岡目八目……二四
十六 落武者薄の穂に怖ぢる……二六
十七 〃思をつゝむは罪深し……二七
十八 思ひ立つたが吉日……二九
十九 臆病者の據なし……三一
二十 〃思ひかけると切りがない……三三
二十一 鬼も賴めば人を食はない……三四

○かの部

目次

二十二 隱すよりは現はるゝはなし……三七
二十三 可愛さ餘つて悪くさが百倍……三八
二十四 薩辨慶……四〇

○きの部

二十五 聞いて極樂見て地獄……四一
二十六 窮鼠猫を咬む……四二
二十七 氣合……四三
二十八 疑心暗鬼を生ず……四五
二十九 來て見ればそれほどでなし
富士の山……四六

○けの部

三十 言行一致しがたし……四七
三十一 歡樂極つて哀情多し司下の
智慧は後から……四八

○この部

三十二 心は持ち樣氣はとり樣……五一
三十三 後悔は先に立たず……五三
三十四 誤解……五四
三十五 子養はんと欲すれど親待たず……五五

目次

三十六 怖いもの見たし……五七
三十七 好物に祟なし……五八

○さの部

三十八 三人寄れば文殊の智慧……五九
三十九 去るものは日々に疎し……六〇
四十 先んずれば人を制す……六一
四十一 さしあひ……六二

○しの部

四十二 信神念佛……六四
四十三 十遍讀むより一遍寫せ……六六
四十四 心機一轉……六七
四十五 蛇の道はへび……六九
四十六 柔よく剛を制す……七〇

○すの部

四十七 好きこそ物の上手なれ……七一
四十八 住めば都……七三

○せの部

四十九 善にも強ければ惡にもつよい……七四

目次

五十 先入主となる……七五
五十一 急いでは事を仕損じる……七七

○その部

五十二 其日にならればやれぬ……七九

○たの部

五十三 短氣は損氣……八〇
五十四 蓼食ふ蟲もすき〳〵……八一
五十五 手の舞ひ足の踏む處を知らず……八二

○との部

五十六 德孤ならず必ず隣あり……八四
五十七 同氣相求む……八五
五十八 問ふに落ちず語るに落つ……八五
五十九 毒を食はゞ皿まで……八七
六十 燈臺下くらがり……八九
六十一 時にあへば鼠も虎……九一

○なの部

六十二 泣く子と地頭……九二
六十三 學はうより慣れ……九三

○にの部

六十四 憎まれ子世に憚かる……九四

○ぬの部

六十五 濡れぬ前こそ露をも厭へ……九六

○ねの部

六十六 念には念を入れよ……九七

○のの部

六十七 乘氣になる……九九
六十八 喉元すぐれば熱さを忘る……一〇一
六十九 呑む、呑まれる……一〇三

○はの部

七十 話半分……一〇三
七十一 馬鹿の一念……一〇四
七十二 花より團子……一〇五

○ひの部

七十三 人の噂も七十五日……一〇六
七十四 百里の道は九十里が半ば……一〇七
七十五 百聞は一見に如かず……一〇八
七十六 貧すりや貪す……一〇九
七十七 他人の花はよく見える……一一

○への部

七十八 下手な考へ休むに似たり……一一三
七十九 拙手の長談議……一一五

○ほの部

八十 坊主憎けりや袈裟まで憎い……一一六
八十一 佛の顔も三度……一一七

○まの部

八十二 まゝにならぬが浮世のならひ……一一八
八十三 待つうちが祭り……一一九
八十四 まじなひ……一二一
八十五 魔がさす……一二三
八十六 正夢……一二四

目次

○みの部
八十七 三つ子の魂百まで……一二六
○むの部
八十八 蟲が知らす……一二九
八十九 迎ふ顔に矢は立たず……一三一
○めの部
九十 盲人蛇に怖ぢず……一三三
○もの部
九十一 模倣……一三五
九十二 文字を知るは憂患の初め……一三五
○よの部
九十三 夜目遠目笠の内……一三六
○らの部
九十四 樂あれば苦あり……一三八
九十五 雷同附和……一四〇

目次

○りの部
九十六 獵師山を見ず……一四一
○るの部
九十七 隴を得て蜀を望む……一四三
○わの部
九十八 笑ふ門には福來る……一四四
九十九 吾身つねつて人の痛さを知れ……一四六
百 禍は幸の端……一四七

教育適用

俚諺心理百話補遺

目次

一　足元に注意する……一四九
二　鰯の頭も信心から……一五一
三　急がば廻れ瀬田の唐橋……一五三
四　大男相當に智慧が廻りかねる……一五五
五　神は正直の頭に宿る……一五七
六　勘違ひする……一六二
七　疵もつ足……一六四
八　氣で氣を揉む……一六六
九　子ゆゑの闇……一六八
一〇　子を持つて知る親の恩……一七一
一一　悟りが早い……一七三
一二　死ぬる子の見目よし……一七五
一三　十分は溢れる……一七七
一四　十人十色……一八〇

目次

一五 捨てる神あれば拾ふ神あり……一八三
一六 千なりや蔓一すぢの心より……一八四
一七 喋々しいは褪めやすい……一八六
一八 鈍な子は可愛い……一八七
一九 情けは他人の爲ならず……一九〇
二〇 無い物食はうが人の病……一九三
二一 似た者夫婦……一九四
二二 待たれる身に爲つても待つ身になるな……一九六
二三 負るは勝ち……一九八
二四 面くらつた……二〇〇
二五 名物に甘いものなし……二〇三
二六 餅屋は餅屋……二〇五
二七 良く泳ぐ者はよく溺る……二〇六
二八 我身の事は他人に問へ……二〇九

教育適用

俚諺心理百話

浦谷熊吉著

第一 案じるより生むが安い

是れ、出産のことからはじめ何事につけても、豫想した心配よりは實際のことは心易く、苦痛、難儀の少ないことを言つたものである。案じるのは感情の類化に因る所の想像、推理であつて、見聞せる事柄をはじめとし、今日までに得た種々の觀念の中で、その當體の事に多少の關係をもつものが、それからそれへと、出來るだけ多く聯合して活らくもので

案じるより生むが安い

ある。中には、特に誇大妄想の傾向を有し、その勢ひは益々盛んになり、その事に關する、あらゆる苦痛的條件が集注し來るものもある。且つや案じる位の時は、多くは神經も過敏で、想像、推理も常平生よりは頗る盛んである筈である。それ故に、その苦痛に關する觀念の發動すること亦餘程甚しいものである。所が、生むと云ふのは、實際の事であつて、事それ自身の外、元より然かくすべての苦痛的條件が具備せらるゝものでなく、しかのみならず、前の豫想に比較對照せられて、豫想の强かつただけそれだけ、却つて更に心易く感ぜらるゝものである。かう云ふ事は多くの人に普通有りがちのことで、假令ひ、必ずしも何事によらず皆さうであるとは限らぬけれども、かう云ふ一般の感じを言ひ現はす所から起つた俚諺卽ち之である。

第二　あまり選んで糞握る

あまり選んで糞握る

これは多く婦妻を娶ることに就いて言はれる語である。何物でも、あまり選擇し過ごすと云ふと、却つて惡い者を得ると云ふことである。なぜ、かう云ふ事が言はれるやうになつたかと云ふと、卽ちかうである。決して、選ぶと言ふことか原因になつて、その結果として惡いものを得ると言ふのではない。一つは、選ぶことの目的を充分に達しなかつたと云ふのと、今一つは、その豫想と對照の結果として起るところの感情と、この二つから來た觀念である。再思すれば則ち足る、三思すれば則ち惑ふ、と云ふことがある樣に、つまり判斷、推理か明瞭、適確に出來なかつたからである。あまり多くの物事を見聞すると、その事か、元と〳〵

あまり選んで糞握る

己れに密接なる利害關係があるものであるから、勢ひそれに伴ふ情調が盛んに手傳つて、知覺、判斷が公正でなくなり、加ふるに、其れに必要なる時日又は年月が、愈々切迫し來たつて、更に益々冷靜なる判斷が出來がたくなり、隨つて又、疲勞と倦怠とを生ずる樣にもなり、終に甚しき誤認、粗慮の結果、却つてつまらぬ物を取る、と云ふことになるのである。所が、後日精神やその他の事情が冷靜、平穩に復すると云ふと、爰にはじめて、今更のやうに、さてはつまらなかつたと感知するに至るものである。又よしや左程にまで惡いものでなくても、元來、選擇に熱中する位であるから――豫想か極めて高いから、實際の事物がそれと對比される結果、尙ほ一層、惡しく思はれるやうになるのである。この他、なほ色々の理由もあるけれども、主として先づこの二つが、かう云ふ諺の起つ

た重なる理由なのである。

第三　言はぬは言ふに勝さる

言はぬは言ふに勝さる

吾々は、天性自ら、自分で想像したり考へたりするものである。そして、さう云ふことそれ自身に興味を覺え、愉快に感ずるものである。特にその想像が自由であり合理であるほど、愈々益々面白く感ずるものである。又その範圍が廣ければ廣いだけそれだけ、なほ〳〵愉快である。所が、あまりに明瞭に言はれて仕舞つたり、書かれてあると云ふと、自然と、その想像と思考との餘地が少なくなる。のみならず、ともすると自分の意見や同情など、調和することが出來ない樣なことも起つ

て來る。尤もこの語は人事、人情の事柄に關しての場合にのみ言ふものである。科學の說明や、哲學の叙述などの場合のことゝは自ら別の事である。

第四　言ふは易く行ふは難し

言ふことは、どんなことであらうが言へる。吾々は、奇矯なことや、誇大なことは、大に好んで言ふものである。よしや、さうでなく、合理的なことであつても、隨分何んでも言へる。卽ち、理にかなひ希望に應じたこと、理想的なことは幾らでも言はれる。思ふだけのことを言ふ日には、限りのないことである。多くの人は、事々に隨分理想的なことを言

ひたがるものである。青年、少者の如き、經驗の少ない、世故に通ぜぬものほど、特にさう云ふことが甚しいものである。所がさて、愈々之を事實に現はさうとすると、隨分と面倒、故障の生ずるものである。先づ、それを實現する時間と場所とが入る。またそれに關係する人を要する。人間萬事、自己に對する人がある。此等の關係、交涉をもつ、時と處と人とが、さうたやすくは得られるものでない。なか〳〵一致しがたいものである。自分ばかり、如何程思つても人が聽いてくれぬ。又時機と云ふものと場合と云ふものとが、餘程得にくいものである。のみならず、自分の生理狀態や精神狀態なども、始終同じと云ふ譯にはいかぬ。病氣したり氣が變つたりすることもある。と云ふ樣な具合で、色々樣樣な障害に出逢ふものである。只やつて見やうと、前に想つてばかり

居た事とは大分に違つて來る。さて、さうなつて來ると、又知覺判斷等も變ぜずには置かぬ。推理も想像も、大に趣きが別になつて來る。隨つて又感情も動き、果ては意志の上にまで變動を生じて來る樣になる。さうして終に、事は中止と云ふことになるものである。よしや、全く中止にならぬまでも、大に調理鹽梅してやらなければならぬ樣になつて來るものである。少くとも時機と場合とを待たなければならぬ。と云ふ樣な具合になつて來るものである。で、かう云ふ語も起つたわけであらう。

第五　一に看病二に藥

藥の効能あるべき事は元よりである。けれども、その藥よりも、尙ほ看病の方が、より一層大切であると云ふのである。それは、どう云ふわけであるかと云ふと、すべて吾々の精神作用は、その影響を身體に及ぼすこと實に密接にして且つ多大なるものである。昔から、病は氣から起ると云ふ位で、肉體の生理狀態が、その精神狀態に及ぼす所の、影響の極めて大なるが樣に、亦その精神作用が、肉體の生理狀態に及ぼすところの、影響も至つて適切、多大なものである。催眠心理學の示す所、催眠施術の事實によれば、その心に於て極めて厚く信ずることが、如何に適確に、その肉體に顯然たる表徵を呈するものなるかは、實に驚くばかりのものである。今被術者に對して、或る局處(特に神經の輻輳して鋭敏なる處)に、ほら〳〵、腫物が出來た〳〵と、一二度呼べば、見る〳〵、その通

り腫物が出來ると云ふことである。この位に、身心の關係と影響とが密接甚大なるものであるから、その患者(神經過敏の)に最も深き利害關係を有する所の、その看護人の一擧一動、一言一語が、如何に大なる影響を、その精神の快、不快の心理狀態に及ぼすべきかゞ知られ、又隨つて、その病氣の平癒について、最も大なる力を有するものであるかも、正に、明かに知られる所であり、卽ちかういふ諺の出來た所以である。

第六　祈らずとても神や守らん

是れ、全く正心誠意の聲である。正直者の大膽と云ふが如く、內に省みて病ましきところなく、厚く信じ固く取つて動かず、たゞ一意、專心、事

に忠實なれば、何事にても確かに成就するものである。信念の向ふところ、必ずや熱情起り、精力自ら强大となり、事に對しての觀念亦敏活に活らき、隨つて精神勇壯になり、筋肉體力亦自らその勢力を增加し來るものである。それ故にその爲す所の事亦自ら良好になり幸福亦隨つて出て來る筈である。若し夫れ、天災地變等、その他人力の能く及ぶべからざる、所謂運命とも稱すべきところの事物によつて、客觀的には不幸と見らるべきものに遭遇しやうとも、主觀的には何等懊惱し痛悲する樣なことなき筈である。少くとも苦痛を感ずること極めて輕減せらるべく、殆ど無きが如きの狀態に居らるべきである。そして、是れ卽ち、誠に其德の然らしむる所であつて、心理的に言へば、欲望の衝突なく私欲、妄情に苦しめられることなく、又隨つて事理の認識、判斷なども明

晰になつて、何等惑ふ所なく恐るゝ所なきが故である。恐怖は不明より生じ、苦痛煩悶は欲望の衝突、未遂又は不正の感情等より起るものである。ところが、かくの如くに信念立ち、事理簡明にして欲望純粋であれば、また遂に安心の域に達せられやうし、少くとも、それに近づき得べきであらう。是れこの諺のある所以である。

第七　一事が萬事

これは、全くその人の品性人格の表現を意味するものである。その人の一言一行は、すなはちその人の品性人格より割り出されたるものである。或る特殊の生理的條件か、又はその他の、非常の心理的異變の

ない限りは、必ずや、その人の言行の表現は、元と同じ系統を流れるはずのものである。この事には極めて疎忽で、彼の事には非常に叮嚀である、綿密である、と云ふ樣なことは決してあるべきでない。或る一事にはなか〳〵敏活であるが、他の事には極めて遲鈍である、と云ふ樣なことはない。品性人格は遂に蔽はんとして、能く蔽ふことの出來ないものである。遺傳に邊傳、習性に習性が加はつて出來上つた、その品性、その人格の現はれは、事々に千差、萬別に映ずるとは云へ、而かもその源は依然として同一のもので、種々の末派、末流の觀念現象は、辿り行けば、終に同一の觀念中心、同一の意識統覺の根本に到達すべきものである。是れ、かう云ふ諺の、よつて起つた所以である。

一犬虛を吠ゆれば萬犬實を唱ふ

第八　一犬虛を吠ゆれば萬犬實を唱ふ

模倣、雷同は吾人本來の性である。奇を好み珍を欲する、亦吾人の性である。若し夫れ、之に加へて、利害關係があるならば、善は益々善に、惡は益々惡にしやうと勉める、といふ傾向のあるのは、亦實に蔽ふべからざる吾人の性癖である。是故に、若し誰か一人、面白半分にか、又は惡意或は好意を以てか、事を虛構、揑造して之を言ひふらすと、乃ち甲和し乙同じて、忽ちに廣く遠く喧傳せらるゝに至るものである。曰く、火なしに煙は立たずと、かくして、簡短なる自然理法は又た複雜なる人事界にも誤用せられて、益々その勢を逞ふして、遂に底止する所を知らざるに

至る。そして、やがて事は全く實際にありたるが如くに信ぜられ、動もするとそれが、往々にして、個人若くは團體に少からざる迷惑を與ふるに至ることもあるものである。恐るべきかな。愼むべきかな。

一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふ

第九　一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふ

是れ、單に道德的關係を言つたばかりでない。誰れか一人惡い事をすれば、關係ある親子、兄弟、朋友等が亦不幸を蒙り、迷惑することがあるを言つたばかりではない。或る一人が不道德な事をしたり亂暴なことをやれば、隨つて亦あたりの者共までが、自づと感情が發動し、判斷や

一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふ

思慮が不明瞭になり淺薄になり、果ては甲から乙、乙から丙と、次第次第に多くの者までが、氣分情調が惡るくなり、遂には喧嘩ともなり口論ともなり、又甚だしきは、打撲斬殺等非常な騒擾となつて、一方ならぬ大事を生ずるに至るものである、といふ意味を言つたものである。是れ、吾人には感染性があつて、誰か一人の情調が發動すれば、その影響はそれからそれへと移つるものであり、さうしてそれが一たびうつつて、情調がうごきかけると云ふと、則ち血液循環、脈搏、呼吸等の生理作用までが、大に不規律となり不調和となり、やがて神經の活動がその影響を受けて、感覺錯誤し、知覺判斷等亦自ら不正、不明となるに至るが故である。

噂をすれば影とやら

第十　噂をすれば影とやら

これは、噂をしたのが原因になつて、來ると云ふ結果を見ると云ふのではない。もう當然來るべき頃なので、かくは噂をしたのか、或は少くとも、蓋し來るべきであつたが爲めに噂をしたのであるか、或は、隨分さう云ふやうに噂をする樣な處にはよく來べき筈なのであるが故か、又はその噂を其處でよくするので、その噂した時と、噂されるほどの近しいその人がやつて來た時とが、丁度偶然相合つたのかである。何れかの理由によつて居るのである。何となれば、噂される人が、する所へは今や當に來るべきであるにもかゝはらず、チツト遲れて、かれこれと言はれることは普通ありがちのことであり、又さう云ふ噂をする人々や

其の家とは、される人が非常に親しいので、隨つて往來も格別頻繁であるべきであり、少くとも、時々か偶には、必ず來るべき筈の關係ある人に違ひないからである。さうして、さう云ふ珍らしい樣なことや、人の注意を惹く樣な出來事は、自らよく、人々の念頭に殘りやすいことである。で、かくは諺とまでなつたのであらう。

第十一　凝つては思案に能はず

凡そ物事を思案するには、成るべき丈け雜念、妄想の無いことが必要である。況んや私心があつてはならぬ。專心に注意して深く考慮するには、どうしても他に心の散らぬ樣でなければならぬが又、公平に思

ふには、何れにも偏するとなく、注意よく行きとゞき智よく活らく樣でなければならぬ。でなければ、觀念が凝滯して圓滑、敏捷に活動せざるのみか、自然と氣にかゝり、思つて居る事へのみ心が凝り固まつて纏まらなかつたり、一方にのみ甚しく偏して活動することのあるものである。且つ又、さう云ふ樣に凝つて居つては、どうしても、其方に都合よき觀念のみ、それからそれへと出來てきて、其等の連結、比較によつて出來上つた推理、判斷は、勢ひ不當になるものである。その時には覺らぬけれども、後日冷靜になり公平に復した時に、成るほどゝ分るものである。是れ、卽ち此の諺の出來た所以である。

賣言葉に買言葉

第十二　賣言葉に買言葉

人は感情の動物である。普通の人であれば、對する者の一言、一行によつて、多少其心を動かすものである。非常にえらい者か、非常に馬鹿かでなければ、向ふの言ふ、その言ひぶりや、辭づかひによつては、同じ事柄を言はれるにも、その時の感じ、快、不快の度を多少、異にして居るべきである。若し夫れ、言葉それ自身が鄙しくあり、荒くあり、一旦失禮なと感ずるや否や、もはや此方もムラ〳〵と情調が動いて、つい同じ樣に、荒く鄙しき語を吐く樣になるものである。そは當然の事である。且つや、對者がかゝる語氣に出るのは、多くの場合に於て、初めより、已に彼れ自ら不快の感、慊惡の情を抱き居り、之れを發動して居るものである。

感染的、模倣的性情の吾人にして、如何でか亦激せずに居られやうや。吾人の感性が動くのは、多くは感情的に刺激せらるゝからである。よく之れを制抑する、遂に至難のことである。凡人の間に生ずる俚諺にして此語ある、亦實に當然のことではなからうか。

內への善い人は外へが惡るい

第十三　內への善い人外へが惡るい

動あれば反動あり、靜ある所必ず動ある、是れ正に物の通理である。吾人の心情、亦この理に漏れるものではない。萬物一つとして動的ならざるはなく、吾人の身心、亦當に然るべきである。健全なる自然兒は、皆之れを證して餘りがある。で、家庭にあつて、極めて物靜かに無口の

内への善い人は外へが惡るい

人が、外へ出ては、隨分とよく口をきゝ、多辯であり快活であると云うことの多くあるのは、決して驚くに足らぬことである。又之と反對に、外に在つては、常におとなしく意氣地なささうな人の、その家庭に在る時の八かましさ强情さ加減、實に一と通りではない、と云ふ樣なことのあるのも、亦決して怪むに足らぬことである。而も人格の統一、品性の一致に就ては、寸毫も疑ひを挾むを要せぬことである。寧ろかう云うのを以て、その人の、人格の表現と見るべきなのである。世に蔭辨慶と云ふのは、卽ち、この種の人の事を指して云うのである。外でいばられないから代りに、内でその不平を補はんとして大に鳴るのである。

第十四　緣起がよい惡い

緣起がよい惡い

この事の當るのは、全く偶然でないことも澤山ある。大に理由のあることなのである。初めより其樣なこと思はぬ人に取つては、毫頭さう云う樣なことのあるべき筈はない。けれども、若し、已にさう云う樣な事を信じたり氣にかけたりする人には、或は大なり小なりの關係影響を生ずべきである。何となれば、吾人の心意活動は、申すまでもなく吾人の行動、云爲に現はれ、行動云爲は、亦やがて親子、夫婦又は兄弟、朋友などの人事、その他、自己の直接又は間接に觸接する所の事物に多少の關係影響を及ほすべきものである。そして、其の心意活動は、本人の觀念包暈や、信仰情調によつて起るものである、少くとも、其れによつて大

に助勢又は殺滅せらるゝものであるから、何となく面白くないと云ふ様な感じ、卽ち全體の氣分が、その或る仕事、行爲に多少の影響を及ぼすべきは、當に理の然らしむる所である。で、若し、明かに或る事柄に對して、是れは緣起がよいとか悪いとか思つて居るか、特に信じてゞも居やうものなら、則ちその結果が大なり小なり、その爲る所の事物の上に現はれて來、又血族近親に影響を及ぼすことは、元より當然のことである。一知半解の輩が、無暗滅法に是等のことを、馬鹿にけなすが如きは、卽ち一を知つて未だ二を知らざるものであると云はざるを得ない。

第十五　岡目八目

自己に利害關係のある事に就ては、餘程えらい人でないと、どうしても感情、欲念が活らきかけて、自己に都合の善い樣な觀念のみ、續々と聯合し發動して來て、知覺、認識等自ら正しからず、判斷、推理の思料又甚しく偏狹になり、隨つて、結局、斷定そのものも誤りやすいものである。のみならず、之に加ふるに、又色々と想像作用が加勢して、愈々、益々その推想の勢力を逞ふし、旁々情調の、隱然たる勢力もて之を煽動するに至るものである。一處が、それと何等利害關係のない、他人から之れを觀之れを判斷するには、かくの如く、觀念、注意の偏することなく、尤も冷靜に、自らなる觀念聯合や判斷推理によつて想到、斷定することが出來るものであるから、自然、至當の結果を得るに至るものである。

落武者薄の穂におづる

第十六　落武者薄の穂におづる

是れは全く錯覺を起すのである。何んでもない事にまで神經過敏になつて、ひよつと似たやうなものが耳目を刺衝すると、直ちにそれに關連して、その當時最も勢力を有して居る主觀的觀念の、最も活動的なる部分が動き出し、引いてはその全觀念の係續的活動が惹き起こされるに至るものである。最初に刺衝する外界の事物それ自身が、明かに認知されなけりや、決して恐れるに至らぬのであるけれども、初め、その事物によつて、已に錯覺を起した以上、前に、事實に於て恐しかつた經驗的、類似の情調と、殆ど同一の情調を起すに至るものである。これは落武者に限らず、何か非常に怖しいこと、假令へば地震の强烈なのに遭ふ

て、やつと生命を助かつた、と云ふ樣な、非常に恐しい目に出逢つた者の如きは、何か、人の、ドン〳〵とする音や、汽車や電車の響きにまでもあわてふだめいて、戸外に飛び出すことのあるのも、亦これと同樣の心理によるものである。

思ひを包むは罪深し

第十七　思ひを包むは罪深し

心に深く包み隱して置く程のことは、必ずや、人に知られては非常に苦痛を感ずる事がらである。已にそれ程のものであるならば、其等の觀念の活動非常にはげしうて、常に內心深く煩悶するのは理の當然である。否な、それ程の事であればこそ隱すのである。卽ち、隱すから苦

思ひを包むは罪深し

痛が多いばかりではなく、人に知らすことの出來ないほどの苦しいことなればこそ隱すのである。處が、若しそれを思ひ切つて、誰かに打ちあかすほどになつた場合は、はやもう、何等か心に解決がついたのか、斷念が出來たかである。少くとも打明けて苦痛を輕減しやうとの希望が生じた時である。話せば則ち苦痛の輕減せられるのは勿論のことである。加ふるに、他人に話せば多少の同情を得ることもあり、又案んずるより生むが安いと云ふ樣に、思つて居た程のことでない事もある。且つ、打明けて事の外部に發表せられた上からは、前には、獨り心の奥に深くひそめてかれやこれと、一圖にその觀念連合のみやつて居つたのに反して、今では何かと、色々の事柄に氣がまぎれて、それを忘れる、と云ふことにもなる。又隨つて次第に熱もさめ、公平な判斷推理も出來る

樣になつて、萬事思つて居つたよりは、極めて心易くなるものである。で、かう云ふ諺も起つたのである。

第十八　思ひ立つたが吉日

思ひ立つたが吉日

吾々の心は、始終、色々と活らいて居るものであるが、一旦或る事物に就いて心を惹かれ、それが中心となつて、重ね〳〵同一の事物に關して同樣の心の活らきを繰り反へすといふと、爰に又、自づとそれに凝りかたまつて、耳目に觸れる、他の物事は一向影響を及ぼさぬほど、全たくその事物に都合よい觀念のみが、どし〳〵活らく樣になるものである。處が、さて愈々事の實行に取りかゝるには、今一つ、何等か、更に之れを刺

思ひ立つたが吉日

衝し誘導するものを要する。そして、已に何物かによつて動かされはじめた以上は、遠慮もなくドン〳〵と動き出し、到頭實行せずに居られぬ樣になるものである。そして、さう云ふ時には、言ふと爲すこと、皆非常の興味と勢力とを以て滿たされ、その結果は、自づから有効善良である。處が、又妙なもので、若し其時、何等かの外的事情の爲めや何かで、ひよつと中止せざるを得ないことになつて、一旦止めて見ると、さて、今度は、今まで張りつめてゐただけ、それだけ、又反動でもつて、一向力なくなり、前の熱烈であつた心の活らきは、恰も夢の醒めた樣に、又は嵐の止んだ後の樣になつて仕舞つて、爰に又、前には、側へ押しやられて居つた、色々の觀念が、取り止めもなく動き出すか、又はその中に、何か他の、利害關係あるか興味ある事物が、その中心を奪ひ取る樣になり、爲めに、遂にその心は行動に實現せられずして止むに至ることもある。で、かう云う診が出來たのである。

第十九　臆病者の據なし

臆病者の據なし

人事界に於て、吾々の知識判斷に叶はずして、何れとも決定しがたい、と云ふことは實際極めて少ないものである。據ない、どうも仕方がない、と云ふ樣なことは、多くは、或る一時若くは永遠に利害の關係を持つ所のものである。さもなくば、その時、多少苦樂の關係を有する場合又は事柄によつて起る事である。卽ち、大抵感情上の問題である。で、此時に當つて、若し平常より、既に修養の出來て居る人であるか、或は先天

臆病者の瞭なし

的に心強く生れて居る人かであれば、決して、そんなにうろたへ騒ぐものでない、明瞭なる意識判斷の下に、何れか、きつぱりと決行するものである。卽ち確乎たる意志的行動に出づるものである。處が、臆病者にありては、さう云ふ場合に當ると、とかく盲目になりやすく、たゞそれ感情の爲に動かされるものである。そして、一旦、その恐しい、威壓的の場合を免れてから後は、もはや平靜に復して、智的判斷も充分に出來るものであるから、乃ち、茲にはじめて、彼の時には據がなかつた、あの場合には、あゝするより外に仕方がなかつた、とかう言ふものである。是れこの諺の因つて起つた所以である。

第二十　思ひかけると切りがない

思ひかけると切りがない

思ひかけると、その事やその物に關係を持つ觀念のみ續々とはたらいて來て、とめどがないものである。卽ち聯想法によつて、性質に於てか時處に於てか、それに多少の關係、交渉を有する事柄の、意識、觀念ばかりそれからそれへと、續々やつて來て、そして、其等の觀念とそれに伴ふ感情とは、愈々益々、互に援け合つて、最初に、中心となつて動きはじめた心の活らきは、尙ほ〳〵明瞭になり旺盛になるものである。所謂見れども見えず、聞けども聞えずの狀態に入るものである。若し此時に當つて、他から何等か、急激に心を刺衝するものが出て來て、爰に神經、細胞の連結に絶緣の機會を與ふることがなかつたならば、そは遂に底止す

る所を知らざらんとするものである。そして、それが爲めに病氣を起す樣になることもあるものである。で、若しかう云ふ樣な者が、家族若くは知己等の中にあることを知つたならば、宜しく、片時も早く、奇異な事か非常な手段かによつて、其心機を一轉換せしめる樣にせんければならぬ。而も是れ、たゞにかう云ふ特別な場合に於てのみならず、亦日常の家庭又は學校の、智育若くは訓練に於ても、絶えずよく注意しなければならぬ事柄である。

第二十一　鬼も頼めば人を食はない

これは、鬼の眼にも涙と言ふことゝ、同じ事で、卽ち、どんな殘忍、酷薄な

者でも矢張り人間である、情はあると云ふことを意味するものである。抑々、吾々は、元來智と情と意との三方面の、心の活らきを有するものであつて、假令ひ如何なる惡人でも、少しも感情の起らぬと云ふことはあるものでない。己にかく感情がはたらくものとすれば、その善惡の分るゝ所は、唯だその發動の機の、對象如何にあるのみであつて、その對象の如何は卽ち趣味の如何によるものであり、そしてその趣味は習性の如何によるものであつて、始めから、惡人は惡人、善人は善人と、ちやんと定まつて居つて、どうしてもかうしてもそれより動かぬ、といふやうに、先天的に出來てるものでは決してない。若し果してさうであつたならば、教育は遂に無意味のもの、不可能のことと云はるべきである。又それと同時に惡感化と云ふことも分らぬことになつて仕舞ふ。然る

に、事實は決してさうでない。であるから、善人も修養を忘り油斷ずれば、多少惡くなり、惡人も修養をなし勉强さへすれば、多少善くなることが出來る。卽ち、善人惡人共に何れにでも動きうるものである。遷り行きの過程にあるものと言はざるを得ない。たゞその程度と境遇との如何によつて色々と差別があるのみである。それであるから如何なる惡人とても、時によつては無私、善良の心も起り得るものである。況んや賴む拜むと、切に乞はるゝ場合には、豈、多少憐憫の情を動かさずに居られやうや。少くとも、害さぬ、免すと云ふことなしとしやうや。是れ、卽ちこの語のある所以である。

第二十二　隱すより顯るゝはなし

元より隱すのであるから、初めよりかまはずに現はにして居る程に明かなものでない。併しながら、吾々の事を隱して居るにも拘はらず、却つて自づと知られる樣になることのあるのは、何等か其處に理由がなくてはならぬことである。それは卽ちかうである。凡そ隱すほどの事柄は、自己に最も密接不離の利害關係のあるとか、或は事の知れるとそれ自身が、直に自己に苦痛不快を與ふるかであらねばならぬ。處が、吾々の觀念は自己に利害關係の深いだけ、それだけ亦深刻に記憶せられ、又旺んに活動するものである。他の事柄に心が忙殺され支配せられて居る間はともかく、若し少しでもさう云ふことが無い樣になる

と、早速に意識上に顯現しやうとするものである。のみならず、比較的に興味が少ないか利害の感が少ない事柄の觀念は、之れを壓伏してゞも活動しやうとするものである。で、多少心のゆるむ時や、或は神經の疲れた時には、直にその心配の觀念が立ちはたらく樣になり、舉動には愚か、遂には言語にまで現はれるやうになるものである。

第二十三　可愛さ餘つて惡さが百倍

動あれば反動ありと云ふことは、たゞに物理上の事實のみではない。吾々の精神界の活動に於いても亦さうである。非常に面白く感喜したあとは、却つて平常よりもものさびしく悲哀に感ぜらるゝものである。

る。所謂る、歡樂極つて哀情多し、と云ふが如きものである。又あまりに考へ込んだあとは、大につかれて何も考へられない樣になるものである。所が、反對に、何も考へずにボカンとして居つた後は、自然、何かとどし〳〵考へられるものである。それと同じやうに、悲むだけ悲むとあとは、その事に就ては割合に呑氣になるものである。丁度又それと同じ樣な具合で、非常に愛した者や、一生懸命に心盡しをしたものが、恩を思はず不義理な事をするとか、己れに背いて、冷然他人に心を向けるとか云ふやうな場合には、容易ならぬ反情を起すのは元より自然の數である。何でもなかつた第三者が思ふに比べては、到底、全く比較にならぬほどに憎むべきは當然である。

蔭辨慶

第二十四　蔭辨慶

これは前出「内への善い人外へが悪い」と云ふのと、殆んど同じ理法によるものである。始終外に於いていじめられて居つたり、又は自ら怯れて、はき〳〵しないで居たりすれば、どうも面白くないのは自然である。所が、吾々は二六時中、絶えず面白からず日を送ると云ふことは到底出來るものでない。外に於いてだまつて居れば内にて喋べらずに居られぬ。外に於いて不愉快に日を送つてくれば、せめては内にてなりと氣晴れのする樣にせんければならぬ。他人の中や多人數の間で、遠慮がち、ひかへ目がちであつた代りに、家内や小人數の中でなりと、氣張つても見なければならぬ。これと類したことで、他所で他人によい人

聞いて極樂見て地獄

は、却つて家庭に於いて悪いとか、家庭に於いて隨分と愉快にやつて居る人も、他では一向澁い顔をして居る、と云ふやうなことのあるのも、皆此理によるのである。そしてこの心理の利用は、教育上亦極めて大切なことゝ云はんければならぬ。

第二十五　聞いて極樂見て地獄

聞いてとは話を聞いてのことで、五官六識に訴へるべきことを、只、單に耳のみによりて聞くことなれば、色々樣々に想像して、その事物を美化し善解することが甚しい。それでさへ、己に實際よりはその事の優つて見えるものを、且つや、語手が話す時、はや多少の虛誇をなすもので

あるから、それが極樂の樣に思はれるのは尤もなことである。所が、さて實際それを見たりそれに觸れたり、何にかして、よく直接に色々と經驗して見ると云ふと、あれやこれと多少面白からざる實感を與へられることもあり、前の想像の甚しく善美であつただけ、それ丈け、却つて對照的に惡るく、いやに感ぜられるものである。故にかう云ふ諺も起つたのである。

第二十六　窮鼠却つて猫を咬む

吾々の、最も物事を恐れるのは、先づ普通には、畢竟、直接生存に危害があるか、或は間接に危害を被ることになるかの場合である。然るに、ひ

くにひかれず、進むに道ある、所謂る背水の陣で、絶體絶命、しかも、たゞかくなすあるの一事のみ、と思ふ樣な場合には、吾々の精神觀念は大に興奮して、猛烈になるものである。平素のそれに比して、幾層倍も旺盛になるものである。卽ち他に思慮分別の餘裕のない狀態、若しくは寧ろ之を要せざるが如き場合に在つては、たゞそれ一念奮迅の勢をなし、やり徹ほすより外ないのは亦自然である。況んや、若しそれ、小膽、臆病者の、所謂る、前後夢中、精神攪亂と云ふが如き場合に於いて、其の擧動の寧ろ驚くばかり猛烈になるのは、寧ろ當然の事と言はざるを得ない。

第二十七　氣合

氣合

吾々の觀念活動には、恰かも自然界に於ける惰性、習慣性の如きものがある。或觀念が活らきかけると、どこまでも勢よく行き、それに關係交渉のあるものは續々と動き出して、限りないものである。隨つて、さう云ふ樣に觀念の流れてある場合には、實に元氣旺盛であり、又何となく快くあり、勢ひ、進まうとするものである。所が、ひよつと調子がくるひかけると、もう、ふさいで、へんに、いやな氣持になり、一向はきつかず、殆んど觀念進動が停止するが如き狀態に陷るものである。彼の、所謂る氣合と云ふものは、こゝの具合をかしこく機敏に攝取、應用したものである。己れの言はうとして居ることを、向ふから先きにいはれたり、或は思つたよりも大に違つた言行、動作に出くはしたりすると、こゝに全く調子がくるひ出して、それより後は、すべてが何となく受身になるもの

のである。是れ、すなはち對者が、自己の觀念活動の順行を頓挫、障害するより起る所の、心的現象の狀態である。

第二十八　疑心暗鬼を生ず

疑心暗鬼を生ず

何事かに心を一圖にかたむれば、それに關連する所の觀念は、何くれとなく思ひ浮んで來るものである。それと同じ樣に、何人かを疑ひ恐れて之に對する時には、自づとそのことに注意がはらはれ、神經きつく興奮して、見るもの聞くこと、悉く、その疑つて居る事に關連する、種々の危害ある觀念を惹起するものであり、戰々兢々とするやうになるものである。是れ、此語の起つた所以である。

來て見れば其れほどでなし富士の山

第二十九　來て見れば其れほどでなし富士の山

概して、吾々には誇大性のあるものである。何物かを語る時には、出來得るだけ面白く言はうとして、自然と大袈裟に言ふものである。話半分とは、それから起つたものである。然るに、それを聞くものも亦、更に之を擴大するものである。想像は、常に美化せられ、大きくせられる傾向のあるものである。ところが、さて愈々事實に遭遇して見ると、前の想像の過大なりし丈け、それだけ、反對に、大抵の物がつまらぬ樣に感ぜらるゝものである。是れ此語の起つた所以である。

言行一致し難い

第三十　言行一致し難い

言ふは易く行ふは難し、これは何故であらうか。行ふ丈けのことを口にもする、と云ふことであつたならば、さう云ふことはなからう。然るに、吾人は本來自分には行へないまでも、であるべし、であらしたいと、理想的のことを心に念ずるものであり、口にもするものである。寧ろ出來ないことや、或は己れの缺點と自覺する事ほど、尙ほ更、多く理想的の事を望むものであり、隨つて又之を言ふものである。即ち、言ふことに出來ないことの多くある所以である。で、實は言ひやすいことの行ひにくいのではなくて、寧ろ行ひにくいことを言ふものである、と見た方が、本當の解釋であらう。いづれにしても言行の一致しがたいこと

歡樂極まつて哀情多し

のあるのは勿論のことである。（第四參考）

第三十一　歡樂極まつて哀情多し

自然界の現象には、リズムがあり、反動がある。吾々の精神界にも亦さうである。注意にも、考察にも、感情にも皆變化があり、反動がある。何かの事物に對して、非常の興味を以て熱心に注意し、考察した後は、必ずや、今度は、只ボカンと無我の狀態になるか、不精になる者である、それと同じ樣に、何事かによつて、非常に歡樂、興奮したあゞくは、今度は、其反動として、何となく物寂しく、あはれに感ずるものである。是れ、前に快的觀念の盛なりし時分に、識域下に押し込められて居つた、色々な中性

的觀念が――中には面白からざる觀念までが、續々と出現活動する故に、感情はおのづと平靜になり、前のに比べられて、何となく物足らず、さびしき感じをするものである。特に況んや、少しでもいやな觀念の頭出する樣な時には、比較的、相對的に、非常に果敢なく、物哀れに感ずる樣になるのは尤もなことである。

下司の智慧は後からつく

下司の智慧は後からつく

何事を考へるのにも、其の時には專念、一途になる故、一方からは、それに都合よき關係のある心象、觀念が、一々浮んで來て、大に精神界を饒かにし、隨つて綿密、周到なる思慮の出で來るべき筈である。けれども、又

下司の智慧は後からつく

一方から見れば、かくの如く、一生懸命、一念一心になる丈けそれだけ、却て廣く、冷靜に觀察し、考慮することが困難になるものである。是れ、吾々の意識界は、同時に多くの活現を許さず、殊に一の觀念が強く活きつゝある時は、毫も、餘他の觀念が、出現、活動すること能はざるが故である。所が、一旦その事がすみ、多少の時日を經過して、さて色々と、嘗て識域に在つた觀念や、目下刺戟する知覺、表象等が大に公平明瞭に活きかけて、爰に始めて、前には一向に思ひつき、考へ及ばなかつた所のことが、ヒョイ〳〵と浮び出て、さては、かうするであつた、あゝする筈でなかつたなどと、今更の如く歎息するものである。思慮の單純にして、意志の薄弱なるものは、特にかう云ふことが多いのである。是に於てか、かくの如く言ふに至つたのである。

心は持ち樣氣は取り樣

第三十二　心は持ち樣、氣は取り樣

何事かを考へると、それと類したやうな事や、それに前後して起るやうな事やなど、いろ〳〵思ひ浮んで來るものである。それで、何か悲しいやうなことを想像しかけると、また、いろ〳〵と、そんなやうなことを連想して、限りもなく思ひつゞくるものである。そうなると、見るものの聞くこと、何もかもが、何んとなく物あはれに、なさけなく感ぜらるゝものので、もうちつとも、景氣のよい、都合のよいやうなことは考へられないものである。けれども、こゝに一つの工夫をして、若しくは努力して、氣を轉ずる爲めに、何か見物に行くとか、散歩するとかして、ヒョッと心機を一轉さすことにすると、さては、先程までの思つたり考へたりして居

つたことは、いつしか消えゆきて、今は何となく淸々として來る。其の時に續いて、何とかあきらめるやうな工夫をして、たゞもう、積極的に面白さうなことをのみ想像し、希望を作つて、何くれと計畫するやうにすれば、今ははや、それからそれと、愉快、成功、幸福などの、光明の方面に關した事物が、續々頭にうかんできて、愈々ます〳〵元氣がつき、精神爽快になるものである。これみな、吾人の觀念の聯想法によるものであるが、たゞその、轉機の法を案出することが最も大切である。

第三十三　後悔は先に立たず

吾人の考が一轉したり、或は今まで解しかねたことが、急に解るやうになつたりすることは、これみな、一時、或物事に對して、一途に疑りかたまつて居つた觀念群が、多少、時日經過の爲めに、その勢を失つた頃に、今まで押し込められて居つた餘他の觀念――而かも平靜なる觀念が、續續、頭をもたげて來て、こゝに、今まで最强の勢力を有して、はびこつて居つた種々の觀念を、惜氣もなくけなしつけて、殆んど殘す影もなくせしむるやうになり、こゝに始めてあゝわるかつた、かうすればよかつた、あすればよかつたと、大に悔ゆるやうになるものである。これ亦、意識界には、同時に多くの觀念の活らき得べからざる理法あると聯想法あるとによつて然るものである。

誤解

第三十四　誤解

吾々が、何物かを見聞し、何事かを理解すると云ふことは、やがて、吾人の心の反映を意味するものである。「月見れば千々に物こそ悲しけれ わが身一つの秋にはあらねど」又は「此世をばわが世ぞと思ふ望月のかけたることのなしと思へば」などは卽ちそれで、一つの物を見て、悲しく感ずるのも、樂しく感ずるのも、みな自己の境遇、自己の心狀の如何によるものである。たゞに、それのみならず、凡そ吾人の理解すると云ふことには、必ずや正に、吾が心に已に得たる、經驗的觀念や、先天的性質やによつて、これを了得し之を判斷するものである。で、若し吾人の心中に、一途に思つて居ることがあると、對者の言行、風采、態度等は、恰かも暗示

や諷刺となつて、今現に、自己の意識の全部を支配して居る、是等の觀念に、丁度、適合、一致するやうに映ずるものである。即ち、ちよつとした一言や、一動作が、自己には、非常に多大なる解發となつて、刹那に多くの意味を了解し去るに至ることが出來るものである。これ、かう云ふ誤解などの起る所以なのである。

子養はんと欲すれど親またず

第三十五　子養はんと欲すれど親またず

吾人は、今現に觸接しつゝある事物に對しては、左程、樂に思はぬもので、却つて過去のことに對したり、或は遠く離れて見ると、はじめてその

子孫はんと欲すれど親またず

物事を、非常に戀ひ慕ふべく出來て居るものである。特に、取りかへしのならぬ事ほど、殘念さが、一層、激甚なものである。今更のこどく感ずるものである。で、親の生きて居る間とても、別に不孝をして居ると感じもせず、又若し死にでもしたならばと、さして取こし苦勞もせぬが、さてそれが亡くなつて見ると、爰にはじめて、イヤあゝもして置けばよかつた、かうもすべかりしになど、大に悔む心の起るものである。是れ故に、子が親の生存中より、大に孝行をしやう〳〵と思ふて、出來る丈け盡して居りながら、なほ且つ滿足せぬ中に親が亡くなる時には、こゝに、大に歎いて、此の如き語も吐くやうになるものであるで、卽ち親が亡くなつて始めて、たゞその感じの深きを覺ゆるに至つて、かくは歎聲を發する樣になる、と見るべきである。これ、恰も物の澤山ある時には、左ほど

にも喰いたくもないのに、さて無くなると、はじめて、いやにほしく感ずるやうになるのと同じことである。

第三十六　怖いもの見たし

怖いもの見たし

すべて吾人は、珍らしいものは見たい。そして、恐ろしいやうな物事は、さう、いつも〳〵あるものでない。これを見たがるは道理である。又吾人は自己に、直接又は間接に、多少の危害あらうと思ふものは、その、果してあるや否やを、たしかめて見たく思ふものである。で、その怖いものを見たがるは自然である。あながち、怖いものだからとて、それ自身を見たい、と思ふのではない。寧ろ、怖いは怖いが、自己に害がかゝる

好物に崇りなし

かゝらぬかが、確かめたい爲めに見たがるのである。さなくば、知らぬものは、たゞ知りたいと云ふことから見たがるのである。そして、かう云ふことは、必ずしも怖いものに限らない、珍らしいものや、未知のものに對して何物でも同じことである。

第三十七　好物に崇りなし

一體吾々の、或物を好むのは、それが自己の性質にかなつて居るからである。で、その好物の障らぬのは、生理的に見て、尤もな事である。又心理的に見ても、さういふ觀念が、最初から頭にあつて、ドシ〳〵やる日には、何等障害なかるべきである。心に、決してあたるべき筈がないと、

三人寄れば文殊の智慧

固く信じて居ることは、必ず信じただけの結果を見るものである。況んや、かくのごとき食物のことに至つては、己に生理狀態が、それに適應して居つて、寧ろ始めより要求するほどのものであり、それがなくては、却つてその身を弱からしめるが如きものであり、且つや、好物だから、ナアーにあたるものかと、かたく信じきつて居れば、心理的にも亦有益にこそなれ、有害には決してなるものでない。

第三十八　三人寄れば文殊の智慧

凡そ吾人の、或る事物に對しての觀察、思考は、決して全く同一なるものでない。或時限内に於けるものは特にさうである。各自、その性質、

去るものは日々にうとし

經驗、境遇、學問等によつて、異なれる心眼、意識を以て、各々、自己心性のまに〳〵、觀察考慮するものである。であるから、一人でその事物を見、之を判斷し、云爲するときは、色々と、落度、缺陷、不得手などのことがあるものである。所が、それを、三人、四人と、多くの者が、これをする時は、互に他の缺陷、不足の點を、相補足することになる割合で、よい智慧も出る筈である。これ、この諺のある所以である。「三人行けば必ず吾が師あり」と云ふのも、意味はちがうが、亦此の理によるに外ならぬ。

第三十九　去るものは日々にうとし

吾人の意識界には、同時に二以上の觀念がありうべからざるもので

先んずれば人を制す

あつて、其の觀念が意識に表現する所の度合は、刺激の強弱、又は印象の程度の關係によつて異るものであり、又それが連想の作用によりくりかへされるとの度數にも比例するものである。それ故に、日常耳目にふれるもの、若しくはそれに關係あるところの心象、觀念が最もよく、多く表現するのは自然の道理である。然るに、所謂る「去るものは日にうとし」と云ふのは、全く、すべての事情、條件が、かう云ふ理法に背くからして起るところの事實であつて、元より當然のことであると云はねばならぬ。

第四十　先んずれば人を制す

さしあひ

是れ亦氣合と同じ理法によるものであつて、對者相互の觀念、及びその觀念に隨つて起る所の情調の進度を、頓挫さす、せられるの關係によつて生ずるところの現象、事實である。自分の言はうと思つて居ることを、向ふから先きに言はれると、モウ、張合がぬけて、それから後は、何かと受身になつて來るものである。隨つて受身となれば、隨つてつきこまれる、と云ふ具合になるものである。これ、一に、觀念及びこれに伴ふて起るところの情調の、生理的、心理的勢力が、一方は益々弱くなり、一方はまず〳〵強くなるからである。

第四十一　さしあひ

さしあひ

人はよく言ふ。「物と云ふものは、こうしたものである。かう云ふ日に限つて、かやうなことが又た起つた。」などと、さも何等かの必然的因縁でもあるかのやうに言ふ。例へば、非常に急な用事があつて、是非、早く行かなければならぬ、しかも車はかよはぬ、是非徒歩で行かなければならぬ。と云ふやうな場合に、さて、ドン〳〵雨が降つて來る。さうすると、ア、マア常、平生、こんなことは餘りないのに、こう云ふ時に限つて、折悪しく大雨がふる。などゝこぼす。しかし、これ、何もさういぢわるいことでも、不思議なことでも、何でもないのである。その位の大雨は、實は、常にもよく出逢つて居るのである。けれども、さういふやうな急用と云ふことこそ、却つて餘計にあるものでなく、特にさう云ふ雨と、丁度一時になる。といふやうなことは更に甚だ少いものである。である

から、さう云ふ時には、平素はそれ程に感ぜぬ所の雨が、殊にきつく感ぜらるゝものだから、かくはいふやうになつたのである。その他、折が悪い時に限つてかういふことが起る。などゝいふやうなことは、皆これと同じ理由による心的現象なのである。

第四十二　信神念佛

今の若い人はよく言ふ。そんな念佛申して何になる、神を信じてどうする、心さへ誠であればそれでよいではないかと、成程道理な言である。さりながら、已に念佛を申し、信神をやかましく言つて居るやうな人、即ち、合理的信仰の出來ない人々にあつては、かういふ情的信仰によ

つてなりと安心しなければならぬ。そして、さういふ人々にあつては、たしかにさういふ事がきゝめがあるのである。智者から見れば、所謂迷信でも、信者其人に取つては、寧ろ眞正の意味であり、その意味と力とが、その人の身心を支配することは、實に偉大なものであつて、強いのになると、醫術の到底及ばざるほどの功をも奏するものである。いはゆる、鰯の頭も信心から、とは正に、かう云ふ事實から歸納せられたものである。抑々吾々の身心の關係は、實に恐ろしいほど密接なものである。寧ろ、一つであると云つてもよいほどである。であるから、一心一向、純粹に信仰すれば、輕少なる病氣は愚か、餘程重症でも、時によりては癒ゆることがあるものである。又、それと反對に何かの事が氣にかゝて、信實、何か腫物でも出來ると思ひつむれば、則ちそれが出來、神經によつて

十遍讀むより一べんうつせ

病氣になり、隨分重くもなるものである。これ、今の生理的心理學、又は催眠心理學の明かに證するところである。況んや、その信神念佛によつて、安心し若しくは力を得て、精進、勉勵するなどに至つては、その精神的効果の大なること、實に驗くべきものがある筈である。

第四十三　十遍讀むより一べん うつせ

記憶の要件は、印象と再現とである。そして、印象を深く強くするには、專らにしてしかも複雜なる注意と反復、隨つて時間と度數とによること明かである。かくて、已に深き印象が出來れば、再現は必ず容易で

明瞭である。然るに、讀むのは、單に眼のはたらきのみであり、腦のはたらきの關係、單純であつて、刺激の時間も亦書き寫すのに比しては、多少少なく、その他、筋肉のはたらきなども少なく、隨つて反復も多くないから、その印象は自ら弱くて、把住もよからず、隨つて亦その再現も容易からず、或は遂に再現し能はざることの有るのは、元より至當のことである。即ち此の診の起つた所以である。

第四十四　心機一轉

心機一轉

一體、吾々の心は、たゞ意識的にのみ活らいて居るばかりでなくて、他の一方面、若しくは二方面に於いても、亦絶えず無意識的、潛在的に、活ら

いて居るものである。又最初は、何等か心配の事があつてか、或は解決を欲する(多くは處世上)ことがあつて、一時、大に考へ込んで居つたが、いつしか疲れてか、或は何等かの事情かによつて一時中止せられて居つたものゝ、實は絶えず潜在的に活らきつゝあつた所の觀念が、何時の中にか熟成して居つて、今度、何等か外界の事物によつて暗示、啓發せられて、而も、本人の顯現的意識には、恰も突然であるかのごとく、或方向に變更、決定して大に活動するに至るものである。そして、心機一轉とはこの時の狀態を指して云ふのである。しかし、心理學上から見れば、決して偶然のことでもなければ、又不思議な事でもないのである。

第四十五　蛇(じゃ)の道は蛇(へび)

すべて、吾人が物を觀察するとか、知得するとか、了解するとかいふやうなことは、畢竟自己の心の反映である。自己に經驗のないことは、到底さう云ふことは出來ぬものである。少くとも、先祖代々の遺傳、卽ち先天的經驗によらざるを得ない。で、その事物に就いての先有的知識、觀念があれば勿論のこと、又それに類せる觀念及び情調の經驗ある者が、その事物又はそれに類似のものに對して、直にこれを了解し、感悟するのは當然のことである。若しこれに反して、その事物又はそれに類似のものに就いての、何等の先天的若しくは後天的經驗、觀念のない時は、遂にその意味を了解したり、若しくは推察することは出來ぬ。それ故

柔よく剛を制す

に狐のことは狐がよく知り、蛇のことは、へびがよく知るのであるやうに、吾々人間に於ても亦その經驗、境遇、身分、職業等を同じくするものでなければ、遂に、能く其人々のなすことを了解し、若しくは感悟することは出來ない。況んや同情したり、親切を寄せると云ふことは尙更、しがたい。そこで、かう云ふやうな諺も出來たのである。

第四十六　柔よく剛を制す

動に反動あり、反動に對比のあるのは、自然界の事實であるがやうに、吾人の心性にも亦同じ理法の行はれるものである。元來吾人は、なかなかの勝氣あるもので、向ふが強く出れば、丁度それに正比例して反抗

しやうとする傾向のあるものである。所が、これに反して、向ふの出方が柔かであれば矢張り自分の方も柔がざるを得ない。少くとも、つよく出ることの出來ぬやうになるは、恰かも護謨毬のそれのごとくである。で、若し夫れ、眞によく、人を制し、人に勝たうとする者は、却つて能く自己を靜穩にし、優しくして出ぬければならぬ。婦人の涙には、已に振り擧げた勇者の手でさへ、ひるまざるを得ざることのあるのは、蓋しかう云ふ心理があるからであらう。

好きこそ物の上手なれ

第四十七　好きこそ物の上手なれ

凡そ、物が上手に出來るとか、事が成功するとか云ふことは、全くその

好きこそ物の上手なれ

人の神經活動、精神靈動の精緻、巧妙、熱誠等の結果である。開してその物をするのに精緻、巧妙なるは極めて注意深きが爲めか、若しくは熟練のためかである。然らざれば、少くとも先天的遺傳、傾向のためである。卽ち祖先の經驗修練の結果である。吾人が、或る物事に注意深いのは、その事に先天的に興味を有して居るか、又は耳目、筋肉等の後天的習慣、熟練の爲めかであり、そしてその熟練は又、自ら興味を意味して居る、更に況んや、熱誠に於いてをやである。その事物に就て深い興味を有し、眞實、事それ自身を愛好して措かざるが故である。これ卽ち此諺の出で來つた所以である。

住めば都

第四十八　住めば都

自然界の事物に、すべて惰性、習慣性のあるがごとくに、吾人の心性の傾向またかゝる規則にもれないものがある。で、最初は、甚だ不快に感じ、いやに思つて居た事物人物でも、久しくこれに馴れ染めば、遂には、案外これを愛好するに至ることもあり、少くとも、その、缺點、不足を忘るゝに至るものである。かくて、遂には、その見なれた、きゝなれたと云ふことが、やがて却つてなつかしい、戀しいと云ふ感じを惹き起すに至ることすらあるのである。知らないものより知るものを愛好し、少しく知るものより、多く知るものを、より多く好愛するに至るのは正に人情の常である。くりかへすと云ふことは、たゞに記憶をよくする法則にか

善にも強けりや惡にもつよい

なふばかりでなく、又趣味、情愛を厚く、且つ深くするものである。で、最初は、こんな不自由なところ、こんなさびしい片田舎などゝ、きつうこぼして居つた處も、二年三年と年月を經て見ると、つい親みがついて來ると同時に、今度は却つて其等、不足缺點を打忘れ、又見捨てるに忍びざるに至るものである。啻に住居のみでない、その他の事物に於ても亦同じことである、これ卽ち斯の如き諺の起つた所以である。

第四十九　善にも強けりや惡にもつよい

何事によらず、吾々が最も艱難とすることは、恥かしいとか、怖いとか

云ふ感情に制せられずして、心に、果して之は正しい事である、爲すべきであると判斷したことを、實際に行ふと云ふことである。かうしたい、かう言ひたいと云ふことを、敢て斷行することである。ところが、既に善いことを鞏固にやりとほす程の人は、亦惡い事でも、一旦決心したからは、何處々々までもやり通し、仕終ふせるといふ所から、かういふ語が唱へられたのである。つまり、何れにしても、感情によつて、女々しく制抑せられないと云ふことになり、そして、それは意志の強いと云ふことと、畢竟同一であるからである。

先入主となる

第五十　先入主となる

先入主となる

吾々の意識界には、同時に異つた觀念を置くこと出來ず、又た活らかすこと叶はぬものである。これ、恰かも物理界に於て、同時に同處に二物のあり能はざると同樣である。で、何事にかぎらず、一旦腦裡に深く染み込んだ觀念の、固き習慣性的活動をなすときは、新らしくつぎこまれる觀念は自然驅逐せられて、獨り舊觀念のみ活動するものである。これ、既に舊觀念の、生理的に固く植え付けられたるところへは、新觀念の浸入するの餘地なく、連合の勢力關係弱きが爲め、之を感受し、領得することが困難であるからである。又たとへ、一時チョッと認識、記憶することあるとしても、よく繰り返されて、前の舊觀念を追ひのけ終ふせるまでは――卽ち其位置を奪ひ取るまでは、矢張り、直に舊觀念の活動、勢力に追ひ立てられ、隨つて又一方、それと同時に、頗る恐しき勢力を有

して動く所の感情、同伴的おなじみと云つたやうな感情、しかもそれは極めて惰性の强い感情によつて、遠慮もなく押しつけられるが故である。

第五十一　急いては事を仕損じる

急いては事を仕損じる

凡そ吾々が、他の何事かに心をとられるか、注意を散逸せしめて居ると、どうしても此の事に就て、周ねく、ゆるりと思ひを廻らすことが出來ぬ。生理的には此の事について考察すべき腦神經の、活動の血液の供給が、偏頗なくよく行き屆かず、たゞもう他の事、卽ち心をひきつけて居る事物に向つての意識的又は無意識的活動の爲めに要する、その血液

急いては事を仕損じる

の供給のみ盛んに行はれ、また心理的には、他に心を活らかす爲めに、此の事に活らくことが殆どお留守になる。處で、吾々が急ぐ時は、何時でも、今、して居る事、順序より言へば、最後に到達する目的の爲めの道程として、前に必要なる事物の、次第又はその用意、手續等を粗略にし、又は失忘するほどまでに、たゞもう、先の到達點のことばかりに心を奪はれ、それが爲に、遂に到達點の目的それ自身の獲得、成就の曉に於て(其方法の不行き屆きなりし爲めの結果として)大なる缺陷、不足を見るに至るものである。例へば、路行く時、急いで下駄を切つたり、徑路に迷つたり、或は悪い近路に困難したりすることや、又は早く出さねばならぬ、早く渡さねばならぬと、急げば急くほど書きちがへをして、却つて手紙の書上げの遲れるが如きことなど卽ちこれである。

其日にならねばやれぬ

第五十二　其日にならねばやれぬ

十人の人が九人までは、すべて物事は、尻に火がついて來ぬとやれぬ。その日にならなければ出來ぬ。と言ふ。其れは又、どうしたわけかと云ふと、その日が出て來るまでは、やらなくてもよい、少くとも、其日になつてからやれると、かう心の奥に思はれて、どうも氣乘りがせぬ、注意が向かぬ、隨つて、よしや取りかゝつて見ても、どうも運ばぬ、その事についての、必要な觀念が出て來ぬ、手が動かぬ。處が、愈々日が間近くなり、愈その日が出て來ると云ふと、絕對、絕命どうしてもやらなければならぬと決心が出來、隨つて又注意が能く集中して、その事に必要な意識、觀念の活動、聯合等が大に迅速、敏活になり、又豐富になるから、サッサと事が

短氣は損氣

蓮ばれて、自ら容易に出來上るものである。

第五十三　短氣は損氣

急いては事を仕損じると同じ樣に、短氣を起して事をやる時は碌な事が出來ぬ。人にも迷惑かけたり、怪我させたり、己れもまた損害を受くるやうになるものである。吾々の心は不思議なもので、何か一生懸命に思ひ込むと、もう、その事しか意識にのぼらず、それに都合の悪い觀念や、反對の觀念は、潛然と引き込んで居るが、さて、多少の時日を經て、その心が落ち付くと、さて、今までかくれて居た觀念や意識が、偏頗なく公平に活らき、爰に初めて、アヽ、さうでなかつた、かうすべきであつた。なぜ、あんなに思つたゞらう、などと、前に、一途にかうと思つたことが、却つて可笑しく思はれるほどに氣がかはつて來るものである。隨つて、いろ〳〵な善い考も出て來、今まで思ひつかなかつた事柄までも考へ出されるやうになるものであり、萬事具合よく出來るやうになる。

蓼食ふ蟲も好き〳〵

第五十四　蓼食ふ蟲も好き〳〵

食物にもせよ、着るものにせよ、住む家にまれ、職業にまれ、何にせよ、彼にせよ、すべて、吾々の好みは、その人その人の性質と習慣とによるものである。で、甘いものが好きだと云ふものがあれば、辛いものが欲しいと云ふものもある。衣服のがら、色合、家屋の構造なども、まるで、反對の

好みがあるものである。或る人々があまり好まぬ所の巡査も、好んでやる人もあり、あんな女はいやだ、こんな男はすかぬと云ふ人のある代りに、大に好いて、夫婦になる者すらある。そして、どうしてこんな具合に、十人十色、百人百相であるのであるかと云うと、こは、恰かも吾々の面相の一人りも同じのがないのと同様に、その人その人の遺傳、境遇、教育等より、さては生れる時の、神秘的事情、原因等によるものである。人事界の事の、なか〳〵單純に、之を律することの出來ないのは、畢竟かう云ふ複雜な關係があるからである。

第五十五　手の舞ひ足の蹈む所を知らず

吾々が、或る物事に意識を集注して居る時、若しくは、非常にうれしがつたり悲しんだりして居る時は、決して、他の事物に對する、綿密な、思慮、認識をゆるさぬものである。甚しきは、感覺機官もその官能を失ふことすらあるものである。で、こは喜ばしい時のことであるけれども、又悲しさや、怖ろしさの極まつた時なども同じく、何んなに、何して居つたか、何を言つて居つたかさへ覺へないことのあるものである。これ、一つの觀念又はこれに伴ふ感情の、極めて強烈なるが爲めに、敢て他の觀念の活動をゆるさゞるが故であり、多くの事は記憶にすら上らざるまでに、全く意識界を專領するからである。しかもその時、或は走り、或は行き、或は取り、或は持つなどの事のあるのは、これ皆、たゞ平素の經驗、習慣に因る、無意識的本能又は反射運動である。

德孤ならず必ず隣あり

第五十六　德孤ならず必ず隣あり

凡そ、吾々の意識的活動であつて、その各自の趣味嗜好より出ないものは殆んどない。若し、さあらぬが如く見えるものがあつたならば、それは、その嗜好、趣味に適合する目的を達しやうとする、方法として執り行へるに過ぎない。で、こゝに自分と同趣味、同嗜好のものある時は、自づとそれにひきつけられて、互に寄り合ひ語り合ふに至るものである。居を共にし、席を同じくするものである。三人、四人と、同趣味の者が集まるのは元より自然の數で、かの何會、何社と云ふやうなのは、それの團結の大きなものである。獨り道德上の會合、親隣のみではない。

同氣相求む

第五十七　同氣相求む

「似たもの夫婦」とか「其人を知らんと欲せば先づ其友を見よ」とか云ふやうに、同じやうな氣質、品性のものが、互に友人となり、夫婦となるのは又自然のことである。牛は牛づれ、馬は馬づれなど、みな這般の意味の言廻はしであるに過ぎない。そしてその理由としては、たゞ、かくの如きは、吾人自然の性情である、と言ふより他はない。

問ふに落ちず語るに落ちる

第五十八　問ふに落ちず語るに落ちる

問ふに落ちず語るに落ちる

吾々の心を甚だ強く支配するものは、最も吾々の氣にかゝることである。悲しいことや、憂ふべきことなどは、その中にも最なるものである。然るに、吾々の言語動作に無意識的に表はれるものは、永い間の習慣又は本能か、さうでなければ、斯の如き氣にかゝることである。即ち、最も深き印象と、隨つて、最も強き活動的勢力を有する觀念、意識とである。けれども、吾々が、これぞと問はれる時や語る時などには、吾々の大に注意する時であるから、その警戒も亦、それだけ深いゆへに、メッタに口外せぬ、即ち意識的には言はぬ。處が、ヒョッとした時、即ち氣のゆるんである時などに、何にかの拍子で、自然、暗示を與へられたり、又、何事かを話して居る時などに、ひよつとした連合作用からして、フト話したりするものである。少くとも、似たやうな事や、關係のある事を、或は消極

的に、或は間接的に告白することのあるものである。即ち無意識的にしやべるものである。これ、この語のある所以である。

第五十九　毒を食はゞ皿まで

毒を食はゞ皿まで

吾々の、慎みと云ふことは、耻を怖れ、利害を顧慮するから起る事である。處が、一旦悪い事をして、とても罪科免れぬと定まるか、或はどうせ、もう、他人に侮蔑、擯斥されて、到底も、自己の威信、品位を保つ事ができぬ。と云ふことになると、もう、破れかぶれになる。即ち他の事や、將來の事などを考へたり、顧みる必要もなく、又餘裕もない樣になり、どうせ同じ事なら、エーマゝよと、更に幾層倍の悪事でも働く樣になるのである。

毒を食はゞ皿まで

一體、吾々の、怖いとか恐しいとかいつてる間は、未だ、どうにかして免れられる時であるか、たゞしは、多少の時間、猶豫があつて、ともすれば、餘計な事はせずに置かれる、と云ふやうな、希望のある時である。斯樣な時には、いろ〳〵と妄想もし、分別もし、顧慮もしては、躊躇するものである。けれども、それが、迚も免れること出來ないと定まるか、どうしてもやらずに居られない。と云ふ絶對絶命の場合になると、もはや、何等の希望もなければ、妄想の餘地もなく、度胸はこゝにすはり、神經の活動は却つて平調になつて來て、その爲さうとする方に專らになるものである。全力が傾注せられる樣になるものである。これ卽ち、觀念集注の理法により、それが必要なる事物の觀念聯合のみ行はれる樣になり、餘他の懸念、妄想等の、心の散漫がなくなつた結果として行はれるところの、心

的活動である。獨り惡事のみに於いて然るのみでなく、善事に於ても亦然りである。「窮すれば通ず」と云ふことも亦この理法によるのである。故に、吾人は、斷乎として心を固め、一心一向にさへなれば、如何やうな事でもやれるものである。

第六十　燈臺下くらがり

燈臺下くらがり

燈臺の直下や、ランプの直下は、却つて暗くて物が判明りにくいが如く、あまり接近して居る事柄や、親密なる人物等に對しては、その眞相は、却つて知れにくいと云ふことを意味するのであるが、其れはあまりに近すぎると、自己の觀念が多く加はるゆへに、虛心、公平にそれ等を觀察

燈臺下くらがり

することが出來ないからである。で、利害關係が少いか、又は全くそんなことのない、遠い他人から見れば、一目の下に、その善惡、正不正を見得られることでも、又は、事の萠發、起伏でも、どうも、自分の眼には、そのやうに見えず、他人から注意せられ、發掘せられ、教示せられて、爰に始めて驚くやうな事のあるものである。これ、自己に親密であり、利害關係のある者を觀察する時には、兎角、愛憎又は狎侮の念が強うて、他の觀念の流通、融合を塞ぎ、爲めに誤れる判斷又は見方をなすに至るによるからである。又かほどの意味でなくて、遠き所の者ですら知るのに、近い人の知らぬことかはとて、その知らざるに驚いた印象や、觀念は、誰人にとりても奇しく、珍らしく、又强いものである。で、さう云ふ心持を言ひ現はす爲めに、斯くは云ひなし、譬へなされたのでもある。

時に遇へば鼠も虎

第六十一　時に遇へば鼠も虎

吾々の心と云ふものは、ふさぎ始め、引き込みかけると云ふと、とめどもないもので、何事をしても、碌な事が出來ぬ。隨つて、なほ〳〵畏縮し活動がにぶつて、遂に全く無爲、厭世の人となり終ることがあるものである。處が、之に反して、一旦爲したる或事が、大に當つて、得意となる時には、乃ち、それからそれと、することなすこと、悉くうまく行くやうになり、成功は日を逐ふて盛大になるものである。これ、全く觀念聯合や、注意の理法に因るものである。卽ち、時に逢ふて、一つ爲したる事がよく出來、自己の志を得るに向へば、心は益々旺盛になり、何を工夫しても、實行しても、苟もその事物に必要なる觀念、知識は、愈々益々明瞭、活潑に活ら

き、情調亦之に伴ふて快活になり、強盛になつて、更に愈々ます〳〵、それらに必要なる記憶、思考等の働らきを促がし助けるに至るものである。かやうにして、勝はます〳〵勝に、優は愈々優に、遂に勢の底止するを知らぬ、と云ふが如き有様に至るものである。これこの語のある所以である。

第六十二　泣く子と地頭

鎌倉時代に於ては、地頭の權勢極めて強く、とてもかなはなかつたものだが、それと同じやうに、泣く兒にはとてもかなはぬ、と云ふことである。啻に子供ばかりでない。泣かれると云ふ事は、誰れに限らず、かな

はぬもので、大抵は我を折り、己れをまげても許すものである。それは、「柔よく剛を制す」と云ふのと同樣で、吾々の心は、對者が敵對すれば、それ相當に興奮赫怒するものゝ、之に反して、若しかよはく、やさしく出られ、殊に哀願でもせられると、大抵のものは、進んでこれを打たうとはせぬものである。況んや、泣かれでもすると、上げた掌も、自ら下りるものである。かう云ふ具合で、小供や婦人の泣くのには、屈强な男子に敵對せらるゝよりも、却つて心苦しく、遂には敗けるに至るものである。これ此語のある所以である。

第六十三　學はうより慣れ

これは習ふの意でなくて學ぶの意味である。扨して、學ぶのはやがて知ることである。けれども、それは實地事物にあたらないで、單に書物や口授によつて得た所の知識たるに止るのである。處が、慣れると云ふことは、實地の經驗、若しくは實驗を重ねて、眞に事物それ自身を體得、了悟することである、熟知することである。云ふまでもなく後者は前者に優れるものである。これ此語のある所以である。

第六十四　憎まれ子世に憚かる

小供は總じて可愛がられるものである。處が、憎まれるやうな小供が、世に憚るのは道理のある事である。かやうな小供に限つて、達者であつたり、よく物が出來たりして、なか〳〵えらくあるものである。と云ふことを意味するのである。が、これは元より當然のことで、敢て怪むに足らないのである。寧ろ健全であるから、あばれさはぐのである。健全な身體にやどる、健全な心を以てやるから、よく物も出來、何事をやつてもしつかりとして、成功するのは當然である。尤も、憎まれるやうな小供は必ずしも皆さうとは云はれぬのであるが、こんな樣な小供の中にはさう云ふやうな者があることは事實である。と云ふことを言つたのである。又さう云ふやうな事は、兎角人の目に立つて、人々の心によく映ずるものであるから、左樣に諺とまでなつたのである。

濡れぬ前こそ露をも厭へ

第六十五　濡れぬ前こそ露をも厭へ

人は、大抵は虚榮心の強いものである。その位であるから、自己の價値の墜ちることを、甚だ耻ぢ厭ふものである。で、誰れも他人に笑はれぬやう、褒められるやうにと、つとめて居る。處が、一朝、耻辱をさらし、とても回復の見込なきまでに、墜されたことを自覺する時は、えゝ、もうままよと、どのやうな悪い事でも仕かねまじくなるものである。況んやその、已にした事柄の類については、もう破れかぶれ、何處までも進むに至るものである。恰も、行く路の露に、初めのほどは、極めて用心深うて、ぬれぬやうにした人が、既に、多少ぬれかけてからは、もう、なんのその、無暗に勢よく濶歩するやうになるのと同じやうである。これ、最初は、用

心に必要であつた觀念や、亦それに伴ふ情調などが去つて跡方なく、今はたゞ餘他の觀念と情調とによつて、隨意に行動するからである。

念には念を入れよ

第六十六　念には念を入れよ

物を見るにしても、端から端まで幾度もく〳〵、よく念を入れてするのと、たゞ、ちよい〳〵とするのとは、其の得る所の認識觀念に、大した相違のあるものである。其の明確の度は到底比べものにならぬ。又話をするにしても、聽くにしてもさうである。況んや、何か大事のことをするせぬ。といふやうな場合に當つて、思慮する時などに於ては尚更のことである。小さな事から大きな事に至るまで、人間萬事、念を入れ

念には念を入れよ

て、すると、せぬとに因つて、結果の上に、大變な相違が出來るものである。それはどう云ふ譯であるかといふと、一體、吾々の心の活らきといふものは、何時でも同じ具合に、同じやうな勢ひで、行はれて居るものでない。時には、考へが非常に明確、迅速であるかと思へば、又時には、甚だ不明確、遲鈍である。といふやうなこともあり、先きには、甲の側の觀念が我物顔に蔓つて居たかと思へば、今は、不思議にも、全くその俤を隱して、乙の觀念が、時を得顔に、一人舞臺をやつて居る。といつた風に、大に變化があり、差引のあるものである。其の他天氣だとか、身體の具合だとか、色色樣々の、內外の關係、事情により觀念聯合の具合によつて、心の活らきが異なるものである。で今日は、是でよい、結構だ、是以上のことは決して無い。と一圖に思ひ込むでやつたことでも、後日には、惡い事をした、

過つた。と甚だ後悔するやうなこともある。ところで、若し、よく落着いて、今も、後も、今日も明日も、といふやうに、一度ならず、二度も、三度も、四度も、幾度も、時をちがへ、日を超えてすると、あゝも、かうもと、色々に考へられて、そこに自ら公平、穩健な分別、誤りのない判斷が出來てくる。それで、かういふ諺も起つたのである。

第六十七　乘り氣になる

乘り氣になる

すべて吾人の情調は、觀念の明瞭と、その活動の反覆とに從ふものであり、觀念の活動は、認識が明瞭になり、くりかへさるればさるゝほど、なほ〳〵盛んになるものである。又、情調が盛んに活動すればするほど、

乘り氣になる

それに一致する所の觀念はいよ〳〵ます〳〵明瞭に、开して隆盛になるものである。かやうにして、或事物に對して、最初はさほど熱心でもなく、殆ど受動的であつた人が、今では實に大に熱心になり、能動的になる、と云ふことがある、之れを、俗に乘氣になると云ふのである。又、最初は爲ることがうまく行かなかつたに、それが偶々よく出來、爾後追々と、上手に、よくやれるやうになつてくる。すると、それをます〳〵盛んにやつて行かうとするやうになるものである。斯う云かやうな時にも又此語を用ゐる。一體、吾人は、其のなすことが、うまく行けば行くほど亦快感も抗進するものであるから、勢ひ調子づくものである。なぜなれば、すべて吾人の生存には、生存欲にかなう所の觀念の、強く活く時は、吾人の情調は自ら快的抗進をなすものである。然るに、意志の方向に

順應するところの境遇、傾向は、卽ち、すべて性質に於て、吾人の生存又は生存の欲望にかなふことを意味するものである。それ故にかう云ふ樣な場合には、概して乘氣になるのは實に尤もなことである。

第六十八　喉元すぐればあつさを忘る

喉元すぐればあつさを忘る

吾人は、概して現在若しくは將來の苦痛と快樂とにつよく制せられやすく、隨つて過去の苦樂は忘れやすいものである。特に苦痛の如きは忘却しやすい傾向がある、で、一旦その貪つた享樂の爲めに受けたところの苦痛は去つてしまつて、時を經れば、今はすつかり其事を忘れて、

現に得つゝある所の快樂を永くつゞけやうとするものである。たとへば、氷水を澤山呑んで、苦しい下痢をやつたことを忘れてしまつて、復た澤山にそれを飲まうとするが如きである。

第六十九　呑む、呑まれる

よく人は言ふ。誰れにのまれたとか、誰を呑んでかゝるとか、そしてその呑むと云ふことは、最初より向ふの觀念活動に制抑を加へ、よつて以て、其の積極的情調を弱くし、意志を薄弱ならしむることである。未だ面會せざる時からの偉名や勢力や、又は初對面の時の、其の態度や眼光や語調などによつて、對者に一擊の鐵鎚を與へ、彼をして、早く心臟の

鼓動を攪亂せしめ、腦神經の活動を痲痺さし、遲鈍ならしめるのである。而して呑まれるのは、正に此の反對の立場に居るのである。

第七十　話半分

概して吾々には、忘想性、誇大性、好奇心等の性質がある。で、何事にもらず、見聞したことや經驗したことは、多少大きく言ひたがるものである。其まゝを話しては、何となく、聽く人も面白がるまいと思はれ、又話す自分も、話しがひのないやうに感ぜられるものである。それで聽く人は、初めから、これを話だ位に思つて、三割や五割は割引してかゝつて居る。そこで、かう云ふ事も言はれるやうになつたのである。

馬鹿の一念

第七十一　馬鹿の一念

吾々が或事を躊躇して、やりかねるのは、色々と他を顧慮するからである。あとさきを考へるからである。そして、經驗があり、知識があり、學問があればあるほど、餘計にさうである。その理由は、一體吾々の、考へるとか、想ふとか云ふことは、つまり、吾々の見聞きしたことや、その他の經驗せる記憶又は觀念等より起る所の想像、推理など、意識の連合、對比的關係に外ならぬのである。處が、馬鹿とか愚人とか云ふ者は、元より此等觀念の少き者、缺乏する者であるゆへ、何事についても、考へるとか、思ふとか云ふことが、極めて簡單である。だから、つい、直に決斷、實行するものである。是れ、この語の起る所以である。

花より團子

第七十二　花より團子

凡そ吾人は、未來に向つての想像よりも、現在の實感に動かされやすいものである。況んや、あてにならぬことよりも、實際今得らるゝことが望ましい。更に況んや、花を樂み美を味ふほどの餘裕なき、たゞもう、目下の急に迫られるものに於ては、云ふまでもなく、今日を救ふに足る、實用のものを欲すべきである。是れ此の語のある所以である。また「來ん度の百より今の五十」と云ふのも、亦、これと同じ理によるものである。

第七十三　人の噂も七十五日

吾人の意識界は、同時に二以上の、心の活動を許さぬものである。記憶は、時日を經ればふるほど薄弱になるものである。處が、一方吾々の耳目を刺激し、意識に起るところの現象は、日一日と、新らしく殖えるものである。新奇なことであればあるだけ、たび〳〵吾々の頭にうかび、意識上に活かうとするものである。で、少しでも、古い經驗に對する觀念は、日一日と、其の活現、復起の度數と程度とを減少するものであり、遂に、殆んど忘却するに至るものである。少くとも、あまり氣にかけぬやうになり、左ほど感じないやうになるものである。これ此の諺のある所以で、七十五日とは單に口調からの、大まかの數である。必ずしも七十五日に限つたことはない。

第七十四　百里の道は九十里が半ば

吾々が道を行くに、十里行くべきものとすれば、九里ほど行つた邊は、よほど、もう疲れた時で、あとの一里に對して感ずる苦勞は、恰かも前の四里五里に相當する位である。且つや、最初踏み出した時は、元氣は新たであり、身體は健全であり、加ふるに、これから十里と云ふ覺悟もあることであるから、其の八九里は大に勢ひよく進むものである。けれども、もう、それが一二里と云ふ頃になると、すべてが、つかれて來、開して、氣の張りも弱つて來るから、旁々その主觀的疲勞は、今の一里を行くのに、

百聞は一見に如かず

恰も前の八里九里を行くが如き感想のせられるものである。これは、單に道行くことに限つた譯ではなく、何事によらず、すべて、かういふ具合のものであるから、それで、かう云ふ諺が出來たのである。

第七十五　百聞は一見に如かず

總じて、具體的の話は抽象的の話よりは判明りやすく、記憶しやすく、隨つて又印象の深いものであり、其の知識も亦自ら明瞭になるものである。況んや、事物を見ると云ふと、直接に、目の神經を刺激せられ、隨つて、それに對する感覺も起り、感情も生じて、それ〳〵の關係が確實になり、聯合の印象が、一層、明瞭になる。更に、況んや、總じて、目よりの印象、記

憶は、耳よりのそれに比して、大に精確、深厚なるものである。故にかう云ふ諺のあるのも洵に尤もなことである。

貧すりや貪す

第七十六　貧すりや貪す

衣食足りて榮辱を知り、倉廩充ちて禮節を知る。と云ふことがあるやうに、餘ほど偉らい人でない限り、先づ普通の人は、貧しくなると、心がきたなくなりやすいものである。丁度小供が、無い時ほど、餘計にほしがつたり、すくないものほど、却つて食いたがつたりするのと同じやうな具合で、自づと心がさびしくなり、物がチットでも餘計にほしくなる。少くとも人に讓るべきものをよく讓らず、貰ふのを恥づべきほどのも

貪すりや貪す

のでも、つひ貰ふやうになる。背に腹はかへられぬ。といふやうなわけで、第一、生理的缺乏が生じて、これを補はうとする欲望があり、次で、心理的にも亦、自己保存上、自己の欲求の切なるものゝ觀念が、きつくなつて來て、とても、他人の身の上や、他人の利害やを考へて居る餘裕のないやうになるものである。況んや、他人の謗るのや、笑ふこと位は何にもかまはぬ。といふやうになるものである。かやうにして、絶えず、久しう、さういふやうなことをくりかへし繰りかへして居ると、ついには、それが第二の品性となつて、愈々貪慾になつて、毫もそれを意識せぬやうになるのである。それで斯う云ふことを言ふのである。

他人の花はよく見える

第七十七　他人の花はよく見へる

吾々が、他人の物事を見るときには、概して、その客觀的方面のみを想ひ勝のものである、其の人が、其の時、其の處に於いて、どんなに感じ、どんなに思ひつゝあるかは、なか〳〵判明らぬものであり、又敢て洞察しやうともせぬものである。たゞ其の表面に流れゆく樣や、畫のやうな靜的方面をのみ想像するものである。これに反して、自己のことになると、如何なる事柄についてゞも、何時も、時處の如何にかゝはらず、主觀的感情の起るものである。どうしても、さう小說的、非人情的、客觀的觀察のみは出來ぬものである。少くとも、何事によらず、其の事物に對して、多くの場合に於て、苦樂何れをも、互交的に感ずるものである。處が、他

他人の花はよく見える

人の事になると、先づ其の主觀狀態の判明らぬ上に、たゞ、その現はれの方向のみを容易に、そのまゝに受取り、或は、極く美的に、其の樂しげな方面のみを見て、之をうらやむのは人情の常である。例へば、他人が書をうまく書いて居る時、その傍から見て居ると、たゞ其の筆の跡のみ見て其の人が、如何に頭に考へ、如何に筋肉を勞して居るかを思はないで、あ實にうらやましい、如何にもすら〳〵と樂しさうだ。と思ふやうなものである。他人と對坐して話して居る時に、自分は、足の痛さや、人々に對する氣がねや、何やかや、常に腦中に往來して居つて、絶えず、苦勞を感じつゝあるのに、それに引きかへ、彼は、如何にも面白さうに、たゞ話しにのみ氣を取られて、樂んで居るかやうに見える。かう云ふやうに、他人の内うらは、なか〳〵分りにくいものである。そして、かう云うこと

は、恰も自己の内うらを他人に知らさぬが如くである。さう云ふことを打忘れて、たゞもう、他人の家庭や、職業や、旅行や、談話や、何かゞ、すべて自分のよりも、より多く面白さうに思はれ、愉快らしく見える。斯の如き僻は、恐らく誰にでもあらう。これ此語の起つた所以なのである。

第七十八　下手な考へ休むに似たり

下手な考へ休むに似たり

再思すれば足る、三思すれば惑ふ。とあるやうに、普通人の、愚圖々々と判斷の足らぬ考へは、寧ろ考へざるに劣るやうで、何等の功なきのみか、却つて害あるものである。と云ふのは、實は考へるのではなくて、惑へるのであるからである。考へると云ふのは、澤山の經驗や又は學問

下手な考へ休むに似たり

知識の成果によつて、いろ〳〵の方面から、或一つの事柄を説明しやうとし、又は多くの、其等の材料を、より多く以て來て、其れによつて歸納して、より確かなる、より有益なる結論、斷定を得やうとすることである。然るに、愚者はこれらの經驗、知識少なきか、或に其の連結、比較等の心的活動の過程、習慣の通路を缺ける所の頭腦を有するものかである。それ故に、たゞ、同じことをのみ、くりかへし〳〵して居るか、然ちずんば、感情的にのみ、今日は是、明日は非と感じつゝあるばかりである。で、遂に何等の進歩や發明があるではなく、その斷や、妄にあらずんば則ち輕なりである。これから云ふ諺の起つた所以である。

拙手の長談議

第七十九　拙手の長談議

是れ、前のとよく似たことで、愚者共が相談することは、たゞもう同じことをのみくりかへして、何等新らしい事實、説明に逢著せず、又一つの事を解決、説明するにつけても頭腦、明確ならざるがゆへに、その論理當を得ず、言葉、枝葉に走り、思ひ岐路にのみ迷ふて、遂に歸着する所を知らず、少くとも、二言三言で要領を得べきことを、たゞそれに到達する所の材料や、手段たるに止まるものにのみ、永らくの時間を費すばかりである。これ畢竟其の頭に於いて、比較、類推すべき材料が少ないのと、又事物を了解すべき概念に、甚だ缺乏して居るとによるからである。且つや、加ふるに、推理、判斷に於ける腦活動の傾向と習慣性とを缺如せるが

坊主憎けりや袈裟まで憎い

故である。

第八十　坊主が憎けりや袈裟まで憎い

感覺に伴ふて、必ず何等かの感情が起るがやうに、觀念に伴ふても亦、必ず何等かの情緒、情操が起るものである。さうして吾々の觀念界は、一の事物を思へば、必らずや又、やがてそれに接近、類似する、他の何等かの事物を想起するものである。且つや、觀念に類似、接近の法ある如く。かゝる觀念の聯合に伴つて、其れに添う所の情緒、情操が起るのは、亦當に自然の數である。ひとり、坊主と袈裟との關係のみならず、萬事かう

佛の顏も三度

云ふものである。

第八十一　佛の顏も三度

凡そ吾人は、珍らしいと云ふことに對しては、一種の快感を覺えるものである。それ故に餘ほどの醜惡、嫌厭の感あるものにあらざるかぎり、物それ自身に對して、決して不決の感を起さぬものである。まして、少しでも利益あるか、若しくは越味に合ふものであれば、一度や二度は必ず快感を以て迎へるものである。けれども、それが同じやうに、三度も四度も幾度となく、重なつてくると、却つて不快の感を起すやうになるものである。これ、吾人には又、單調にあき、不變化を嫌ひ、變化を好む。

といふ性情があるからである。若しそれ、事それ自身が、已に初めより、多少、不快の感を與へるものであつたならば、それは申すまでもないことであるが、たとひ、普通のものであつても、それが、餘りたびかさなるといふと、爰に自ら嫌悪の情起り、更に度を重ねると、愈々、不快の感を增すものである。是れ、此諺のある所以である。

第八十二　儘にならぬが浮世のならひ

まゝにならぬと云ふことは、卽ち自己の意志通りに行かぬ。と云ふことである。處が、客觀的、空間的に云へば、元來吾々の耳目、其の他の官

能の誘導し、欲望情慾の種となるものは、殆んど無數である。又主觀的時間的に云へば、吾人の生理狀態や、隨つて又感情には變化あり、吾人の知識觀念は絕えず變遷若しくは進步するものであるから、乃ち、よつて起るところの欲望には、決して限りのないものである。かやうにして、意欲なるものは、本來、進轉的のものであるゆゑ、これに絕對的の滿足を得るといふことは、到底不可能である。であるから、此の如き諺も起つたのである。

第八十三　待つうちがまつり

何事によらず、吾人は將來のよさゝうなことや、面白さうなことは、い

待つうちがまつり

ろ〳〵と之を想像し、美化し、實際あるべきよりは一層よくするものである。あゝもあらう、かうも出來やうなどゝ、爲すべきことをつもりもし、あるべきことを豫想もする。處が、それが愈々現實されるとなると、さて思つたほどのこともなく、又つもつたやうにもゆくものでもない。自然的又は人爲的に、色々と故障も起れば、邪魔も這入るものである。で、それ丈でも多少當てがはづれるものであるのに、實の所、吾人の想像は、大抵は、實際あるべき事實よりは、餘程誇大して置くものであるから、對比上、なほ一層つもりが違つて非常に不足を感ずるものである。加ふるに、已に現實となれば、今は歩一歩、刻一刻、過去の夢と過ぎ去る。此のはかなさをも意味して、かゝる語の出た所以であらう。

第八十四　まじなひ

まじなひ

多少、科學的の知識のある幼少の者が、そんなまじない事がきくものか。などゝ一概にけなすのは、卽ち一を知つて未だ二を知らぬ。と云ふべきである。なるほど、さういふやうに、はじめから効能がないと思つて居るやうな者や、何にもわからぬ稚兒などに取つては、何等きゝめもあるべきものではない。けれども之を信ずるものには、必ずや多少の効能あるべきである。吾々は、ナーに、こんな事で風邪なんか引くものかと、元氣よくすまして居る時には、常平生ならば引くべき風邪も、決して引かぬものである。それと同じ樣に、假令ひ他人は藪醫者だと侮つて居る。さう云ふ人の診察、投藥でも、これを厚く信じて居る病人に

取つては、思の外効能のあるものである。其他、何物でも深く、厚く、一心一向に信念すると、必ずや、多少の効能あるべきである。それは今日の生理的心理學や、催眠心理學の正に、確に認めるところである。まじなひも亦それと同一の理、法によつて、しかく効能があるのである。たゞ恐るべきは、かゝる心理的治療の効力以上に、生理的害毒の痛切、激甚なるものゝある場合をも、之を知らないで、全く打つちやつて置いたり、或はそれとは知らず、却つて病を重んぜしめ、若しくは併發せしめるがごとき、毒な物を用ひたりするやうなことである。

第八十五　魔がさす

是れ亦、前のと同じ心理法によるものである。たゞ其の性質が反對なるばかりである。例へば、何等かの言ひ傳へによつて、此の刀を持つと、魔がさして人を切りたくなるとか、自殺するとか、云ふやうなことを知つて居るものが――別に修養のない俗物が、其れを持つて、かれこれして居ると、はて、何んとなく氣が變にさして來る。といふやうなことのあるのは、元より自然のことである。たとへ左なくとも、秋水のしたたるやうな正宗の刀を抜きはなてば、誰れでも、何となく、何か斬つて見たい氣がして來ることもあるものである。況んや、迷信者が、かゝるものを持てば、ついそのやうに振舞ふやうになるのは當然である。これ、所謂る、強迫觀念の所爲である。刀は斬るべきものである、此の刀を持つと人を斬りたくなるものであるといふやうな觀念――深く迷信的

にうゑつけられた強い觀念が、自づと壓しやつて來て、思はず手を上げ下ろしさすに至るものである。卽ち、觀念聯合の法と、動神經と觀念力との結合、又は關係より生ずる所の結果である。

第八十六　正夢

吾々の心は、たゞ、あらはに、意識的に活動して居るばかりでない。又かくれひそんで、無意識的にも活らいて居るものである。其の時、それと自分は知らずに居つても、何日か耳にした、目に見たと云ふことも澤山あるのである。で、ヒョッと其の事は、いつか何處でか見たやうなものだ、聞いたやうな事だ。と云ふ事はよくあるものである。それ位で

あるから、夢に見ることも亦あるべき筈である。處が、さて實際さう云ふことに出遇うとすると、爰に始めて、夢が當つたと驚くのである。けれども、豈圖らんや、それは、實に、嘗てひそかに、無意識に耳にし、目にした事柄なので、寧ろ當然遭遇すべきことなのである。又かう云ふやうなこともあるべきである。たとへば、異鄕に在る子女が、夜毎日毎に、非常に、親の病氣を氣にかけて居ることがある。いづれ、里方からは時々容態の報道もあるべきである。處で、どうかして、今四五日も保てばよいがどうかしらんなどゝと思つて居る頃、一夜の夢に、ふと母が枕元に立つて、私は、もう、とても助からぬ。明日が日にも知れぬ。死んだ後は……さてはと、驚いて目を醒まし、あゝ夢であつたか。と、それから毎日氣にかけて居ると、恰かもその日ごろに、母死んだ、すぐ歸れ。と知らせ

が來る。若し斯う云ふやうな事でもあると、卽ち之れを稱して正夢と云ふのである。が、かう云ふやうな事は、元より極めて少いことではあるが、而かもあるべきことである。前章の如きは、たゞ潛在觀念の致すところであり、本章の如きは强烈なる觀念作用に由る夢と、常にある母の死と云ふ事實との、又時にはありうべき偶然の一致と謂ふべきである。

第八十七　三つ子の魂百まで

三つか四つの、小さな時分に、聽かぬ氣の者は、大人に成つても矢張り聽かぬ。元より、年とれば、次第に、其の氣質なりに、多少、穩かにはなる。

けれども、他の同年頃の人々と較べては猶ほ、何處となく聽かぬ所がある。といつたやうな譯で、其の他、どういふ性質でも皆さうで、中々容易に失せぬ。全く亡くなつて仕舞ふといふことは、恐らくはなからう。七十になつても、八十になつても、矢張り幼ない時の俤を、何處にか存して居るものである。吾々の性格は、勿論、境遇又は教育の力によつて、多少變化し得るものである。幼少の時のまゝ、生れたまゝで、一生、全然、變化させられない、變化しない。といふやうなことはない。若しさうであつたならば、所謂、感化も教育も、又修養も何もあつたものでないことになり、それこそ大變なことになる。けれども、實の所、教育の力といふものは思つた程に大なるものではない。感化も修養も亦さうである。たゞ、比較的に、修養と感化とは、狹義の教育よりも餘程、効果が著しい。

けれども、大きく成つてからの教育は勿論のこと、感化や、修養も、小さい時の教育や、感化には到底及ばず、又、其の小さい時の教育や、感化でも、もつて生れた天性には、とても叶はぬ。といふのは、吾々の心、――神經組織は幼なければ幼いほど、どうにも習慣づけられやすく、大きく成るに從つて習慣づけられにくい。そして、其の習慣は、繰り返されゝば繰り返されるほどいよ〳〵深くなる。ところが、吾々の後天的の品性、卽ち生れてから後、習慣づけられて出來た性格は、先天的の品性、卽ち、生れると同時にもつて出て來た、――祖先から、幾千年習慣づけられて出來たのか知れぬほどの性格には、とても〳〵較べられるものでない。先天的の性格は、かくの如く固まりきつたもので、容易に變化されるものでない。とても〳〵、教育や何かで、全然ちがつたものにすることは出來

ぬ。必ずや大なり小なり、其の性質は殘つて居る、そして其れが折に觸れ、事に當つて表はれる。そこでかう云ふ諺が出來たのである。

第八十八　蟲が知らす

是れ、正しく前の正夢と同樣の事の、たゞ事實關係の順序が後先なのと、且つ覺醒と睡眠との差違あるのみである。只ならぬ心配事に對しては、吾人の神經は非常に興奮して居つて、極めて微細な事にも感應するものである。でかう云ふ時には、天氣の惡いことや、溫度、氣壓のいやな時などには、他人よりも特に著しく感ずるものであり、さて、どうも氣にかゝると思つて、出先きにも落ち付て居られず、急いで歸つて見たれ

蟲が知らす

ばはや、もう父の病氣が危篤である。と云ふやうなことは、よくあるべもきである。これ、其の人の生理的心理作用と、病人の生理作用と又自然界の影響との、色々の關係より生ずる所の事柄である。又かう云ふやうなこともある。どうも今日は氣がすまぬ、行つて談判しても、何んだか、うまくゆきさうでない。どうも、試驗を受けても駄目だらう、勝負をしても負けさうだと、何となく、かう感ぜられるやうな時にやつて見ると、果して甘くゆかぬ。これは身心相關の理法と、又潛在觀念の理法とによるものである。心に面白くない時は、第一生理的に申分ある時なのである。それに、既にさう面白くないと思つて居れば、精神、氣力も、自らにぶく、なんだか氣が進まぬ。と云ふのは、さう云ふ時には、はつきりとは意識はせぬもの、、其の對する者、爲さうとする事柄、又は問題等

に就いて、必ずや何等か其處に不安、不確な覺えのあるときなのである。かう云ふ時にやり損なふのは尤もなことである。此等を俗に蟲が知らすと云ふのである。

第八十九　迎ふ顏に矢は立たず

迎ふ顏に矢は立たず

是れ亦、柔よく剛を制するの類である。吾人の心は、概して反撥的彈力性のものであつて、向ふがきまづく出れば、此方も奮激するものである。けれども、若し向ふが落ついて、やさしく出ると云ふと、怒りかけてる者も氣ぬけのするものである。如何に怒りくるつて居るものでも、一方が、實にさつぱりと快よけに、又親切に迎へると云ふと、最初の勢は

何時しか何處へ行つて、漸次おとなしくなるものである。これは、前に述べたる、氣合などゝもよく似たことである。すべて、意外なことは、吾人の心の活動を一頓挫せしめるものであり、又一轉化せしむるものである。特に、感情は感情を制するの力が極めて大なるものである。

第九十　盲人蛇におぢず

吾々は、先天的に怖れることもあるけれども、また其の恐るべきものたるを覺え知つた時に於いて、はじめて之を恐れるものも多くあるのである。暗いこと、極めて大なるもの、見なれぬものなどは、幼稚な時分から、何となく怖れる。かう云ふのは、寧ろ先天的、本能的であるけれど

も、若しそれ、意識的に怖れること、或は知識的に怖れる。と云ふことは、必ずや其の對者の、まことに怖るべきものであることを、認識せるが故である。處が、何んにも知らぬ小供が、さう云ふ大人の恐れるやうなことに對して、一向、平氣で、ちつとも、怖れないと云ふのは、その怖るべきものたるを知らぬが故である。即ち、怖るべき事物に對しての經驗的知識や、推想的觀念をもたぬからである。この意味に於て、盲人蛇に怖ぢず。と云つて、馬鹿大膽、阿呆づよいのを誹ることになつたのである。

第九十一　模倣

模倣

凡そ模倣性は、吾人の天稟であつて、小兒は何でも模倣やうとするのである。まねて、さうして物事の經驗を得、知識を進めるのである。大人、成年でもみな、誰れでも此の性は有するものである。意識的にするのは云ふまでもなく、無意識的無意的に、やることも亦頗る多い。多勢、群集の中で、一人がせきすれば、誰れもかもする。甲があくびをすれば、乙も丙も丁も亦やる。前の一人、二人が走れば、後方の者も思はず走る。一人がヒョッと後、方を向けば、他の者も、皆、思はず同じ方を向く。一人が手を打てば、他の多くは、又、思はず拍手する。と云ふやうなことのあるのは、皆、此の性の然らしめる所である。これには何の理窟もなく、たゞ、かういふ性分が、吾々に生れながら有る。と云ふより外はないのである。若しよく教育上この性を利用するならば、得る所、正に大な

るべしと思ふのである。

第九十二　文字を知るは憂患の初め

文字を知るは憂患の始

前々章に述べたやうに、吾人が意識的に恐れることは、經驗及び知識が、多くなればなるほど、餘計になるのである。之と同樣に、憂ふべき事や悲むべき事も矢張り、經驗又は知識が澤山になればなるほど、より多くなるのである。尤も、同時に、喜ぶべき事や、面白いことも亦あるべきである。けれども、吾人は、とかく憂愁の少なからんことを欲し、しかも、其の方の事柄の印象は概して深いものであるから、自然、此の一方にのみ、かくは注意せられて、かう云ふ語の起るに至つたのであらう。この

事の是非如何や詳細の理論は、迚も、片々たる文章で書き盡されるものでない。

第九十三　夜目遠目笠の内

夜は物のあらが見えなくて、概して物が善く見える。又遠方のものは、同じくはつきりせず、ボツとして、奥ゆかしく見えるものである。それで、人の顔形でも、夜又は遠方で見た方が、概して美しく、良く見えるものである。のみならず、其の人の人格、精神でも亦さうである。あまり近よらぬ方が奥ゆかしく、えらさうに見えるものである。親近に過ぎて、内裡まで知られるやうになると、何となく、やすつぽく見えるやうに

なり、さう尊とげに見えたり、えらく思はれたりせぬものである。それは、一つは遠く、よそ〳〵しく接して居る間は、當方に於いてもさうであるが、亦、向ふでもゆるさぬところがあつたり、飾る處があつたり、隱すところがあつたり何んかして、容易に其の缺點と弱點とが見えず、却つて、得點以上價値以上に、よく、えらく見えるものである。然るに、これに反して、馴れ親むほどに近よると云ふと、嘗て、得點とした點は、多少それほどになかつたとまで、明瞭に見え、尙ほ色々と他の缺點までも見られるやうになり、その上又、向ふの方も親しくなるにつれ、我儘を出したり、地金をあらはすやうになる。それならぬにさへ、馴れゝば、なれるほど(何人によらず)えらくも感ぜず、ゆかしくも感ぜぬやうになるのが、人の心の常であるのに、かてゝ加へて、向ふからも、又かくの如くするに至るも

のであるから、尙更、何とも思はぬやうになるものである。そこで、かういう諺の出たのである。

第九十四　樂あれば苦あり、苦あれば樂あり

樂あれば苦あり苦あれば樂あり

苦樂は相對的のものである。大小、高下、長短等と同じやうに、一方のみあるべきものでない。決して、たゞ樂ばかり感知せられるものでない。苦しい事がなければ、どんな事が樂であるか、樂でないか、何ともわかる筈がない。これは分明にすぎた程の道理であるが、尙ほその上にかう云ふ道理もある。其れは他の感情の上にもある所の對比、照應の

關係である。苦しかつた後の樂は、その實際より(普通平凡の時と云ふ位の意味)餘程、より以上に、樂に感ぜらるゝものである。是れ、恰も高い人の傍の、低い人、白いもの、隣りの、黑い物のゝやうである。のみならず、又かう云ふ條件も加はる。苦しい時に處しつゝある時に、それを通り超へて、樂な時に到達せんことを豫想して居ると、尙ほ其の事實の來ない前から、已に、想像的に享樂の快感を覺えることが、亦決して少なからぬのである。樂あれば苦ありと云ふのも亦、同じ理である。若しそれ、苦勞して働けば、後には必ず富貴になつて樂になる。それと反對に樂な目して、遊んでばかり居れば、後には必ず貧乏になつて大に苦勞せぬければならぬ。と云ふ樣な事は、普通道德上の因果法で、元より當然あり得べき所の事である。

樂あれば苦あり苦あれば樂あり

雷同附和

第九十五　雷同附和

これは『九十一』と同じやうに、主として、模倣の本性によつて行はれるところの心的現象である。例へば電車襲撃の時の如き、群集中の誰か一人が石を投ずれば、他の二三の者が亦同じく之れを投げる。さうすると、又他の者が抛げる。と云ふ風に、五人、六人と、次第々々に多くの者がやるやうになり、遂に其の勢、到底當るべからざるものとなる。かの輿論とか、人氣とか云ふものも、多くはかう云ふ風にして、出來てくるのである。人事の起りと云ふものゝ中心となり、發頭人となる者は、元來極めて小數の者である。その小數の者だけがしつかりとした有意識的行動をやるに過ぎないので、他は殆ど、或は全く、知らず識らずにこれ

獵師山を見ず

に雷同附和して、たゞがや〳〵とするか、少くともいゝ頃加減な考へで、他人もやるから自分もやれ位でやるのである。若しさうでなければ、勢やらざるを得ないやうに、大勢に左右せられるからである。そしてそれは別に何等の理由もあるのでない。たゞさう云ふ性癖が、吾人々性にあると云ふより外ないのである。教育家とか、政治家とか云ふ者は、宜しくかう云ふ人性を利用することを忘れず、善い方の側は、之を誘導し、奬勵するやうにし、悪い方の側は、能く之を未然に防遏することを知らぬければならぬ。

第九十六　獵師山を見ず

獵師山を見ず

如何なる時、如何なる場所に於ても、若し吾人にして眞に、一生懸命、專心一意になつて何事かをすることになるか、何等かの問題について考へることになると、決して自餘の物事を覺えるものでない。餘程珍らしいことか、驚くべきほどの事でなければ意識せぬ。常に耳目に觸れる樣な事柄は一向意識に上るものでない。是れ、吾人の意識界には、同時に二以上の觀念が活動することは出來ぬからである。通常、同時にいろ〳〵の事を聞いたり見たりするやうに思はれるのは、それは、甲の感覺、知覺、又は觀念から乙のに、乙のから丙のに遷ることの、極めて敏活であつて、其の間、全く髮を容れざるが如くであるからである。然るに獵師が目的の獸を逐ふやうな時には、丸で一生懸命、殆んど夢中である。位であるから、迚も心が他の物事にうつり行つてる餘裕がない。卽ち

他の物事の刺激は意識に上るほどまでに、神經の活動、觀念の聯合が出來がたいから、それで、山も何も見ても知らずに居るのである。しかも徑路、荊蕀の間を縱橫無盡にかけ廻るのは、卽ち無意識的の活動、潛在的觀念の活動、乃至は習慣的本能的活動によるのである。

第九十七　隴を得て蜀を望む

隴を得て蜀を望む

俗に、欲にきりなし、と云ふことなのである。これは『八二』と同じやうに欲望に限りのない、吾人の本性を言ひあらはしたものである。否、かくあつてこそ、吾人に進歩があり、發展があるのである。社會、人生に發展があるのである。そして、吾人の知識は變遷的、進歩的のものであり、

感情はうつりゆきのものであり、隨つて意欲も亦さうであるから、吾人の活力のあるかぎり、かくの如く望蜀の感のあるのは、固より云ふまでもないことである。

笑ふ門には福來る

第九十八　笑ふ門には福來る

笑ふと云ふことは、普通の場合に於て快感の表現である。少くとも身心の活元の充滿して居る時である。氣分のよいことの證據である。で、其の人の精神狀態の健全によつての活動の結果、或は物質的の福利來り、或は精神的に幸福を感すべきは(快感それ自身にでも)元より當然のことである。のみならず、さう云ふやうな人の處や、若しくはさう云

やうな人々の集合したる家庭には、自ら親戚、朋友、知己等のつどひやすいものである。それゆゑに、愈々益々景氣よくなり、間接若しくは直接に、其の活動、事業も亦勢ひ繁昌するやうになるべきである。是れ、卽ちかう云ふ診の起つた所以である。

吾身つねつて他人の痛さを知れ

第九十九　吾身つねつて他人の痛さを知れ

自分に經驗のないことは、必ずしも同情し能はぬとは言はぬ。心の活動に觀念聯合、想像と云ふことがあるものであるから、隨つて亦それに伴ふ情緒、情操も、多少起るべきは勿論のことである。けれども、智的

吾身つねつて他人の痛さを知れ

方面に於てすら、其の認識、記憶、推理等を、より迅速、明確にするのには、耳目を實物に觸れしめる必要のあるやうに、その情緒、情操を適切にし、深厚にするには、又た其の物事に實際遭遇することの必要であるのは勿論である。何となれば、こは全く實際の感の回想に依るものであるからである。過去に於いて遭遇した事柄の觀念の回想に伴つて、其の時起つた感情の再起することによつて、又それに似よつた、他人の今の事柄を知れば、恰も自己のことのやうに感ずる所からおこる感情卽ち同情である。是れは恰も智的方面の類化作用の如きものである。で、それと同じやうな經驗のないものには、決して情の類化の起ることはない。よしや起るとしても、適當痛切のものが起る筈がない。これ、此語のある所以である。

第一百　禍は幸の端

これは、禍それ自身が直ちに幸の一端であり、若しくは原因であるとの云ふことを云ふのではない。禍によつて心が刺激せられ、興奮する所から生じ來る精神的効果を意味するものである。それがあまり激甚であつて、其の人の奮發心、勇猛心を刺激するよりも、寧ろ、却つて精神の沮喪墮落を來たさしめるほどのことでないかぎり、少々の災禍は、却つて吾人の精神を鼓舞し、心機を轉開刷新せしめるものである。かやうにして、大に黽勉事に當り、遂に大成功(必ずしも皆々然りとは云ふべからざるも)をするものである。吾人の精神力は、大に決心して、一心一向になると、則ち觀念の活動や神經の作用が、常平生よりは大に敏活、非凡

禍は幸の端

禍は幸の端

になるものであり、隨つて其のする事の結果が、著しく進歩し、盛大になるものである。これ、かくは此語の行はるゝ所以であり、そして、この反對に、幸は禍の端ともなり得るのである。『滿つれば缺くる』とは卽ち此の意味を言ひ現はしたものなのである。

（終り）

教育適用

俚諺心理百話補遺

第一　足元に注意する

足元に注意する

吾々はよく言ふ。足もとに注意せよと、そして、これは、單に道行く時の事ばかりでない。何か他人（ひと）と勝負する、例へば、擊劍の仕合をやるとか、柔術の仕合をやるとか、いふやうな場合、特に角力を取る場合などに、よく言ふことである。又事を談判せなきやならぬとか、むつかしい試驗を受けなきやならぬとか、いふやうな時にも言ふことである。なぜさういふ事を言ふかといふと、都てかやうな時や場合には、とかく吾々

足元に注意する

は氣が逆上つて、或は無暗と恐れなり、或は急つて思ひ込み過ぎて、却つてやり損なうものである。ところが若し能く氣を落着けて、平常事なき時の如くにさへすれば、左樣なことは決して無く、平常、やる丈けのことがやれ、出來る丈けのことは出來るものである。といふのは、頭へばかり血が逆上つて仕舞つて、足もとの方が御留守になると、腦神經の活動が自ら亂調子になり、感情ばかり愈々益々興奮して、感覺、知覺、記憶、推理等すべての觀念活動が、遲鈍、不明確になり、甚しきはその一、二若くは殆ど全部が活動中止のやうな狀態になることがあるが、それが、血を丹田以下、脚部の方にも、不足なく、能く循らして、所謂、頭寒足熱の狀態を保つやうにして居れば、かやうな腦神經の活動が亂調になるやうなことなく、萬事平調正確に行くから、平常出來る丈けの事、本來の能力だけの

事は充分にやつてのけられるものであるから、それでかういふことを言ふやうになつたのである。

第二　鰯の頭も信心から

鰯の頭も信心から

今度の試驗には必ず合格する。なぜなれば、それは、八幡樣に願かけて、百日が間御參りをしたからと思つて試驗を受けると、成る程、合格した。といふこともあれば、此の病氣は屹度直る。かうして一生懸命に、觀音樣に御百度を踏んで居るから、と言つて、別に藥も飲まずに居ても、百日目頃には、丁度快くなる。といふやうな事もあらう。が、かういふことは何も神や佛に限つた譯ではない。假令、それが木であらうが、石

鰯の頭も信心から

であらうが、何んでも同じやうに利益のあるものである。鰯の頭でも、一心こめて信仰すれが、矢張り同じやうに効驗のあるものである。といふのは、それは、何も、八幡樣だの、觀音樣だのが試驗を助けて下さるのでもなければ、病氣を直して下さるのでもない。さういふ願がけをしたり、御百度を踏むほどであるなら、申すまでもなく、一生懸命に勉强もしやうし、又た試驗の時には、何處となく、落着があつて、よく思ひ出されもすれば、甘く考へられもしやうから、自ら成績も善からうし、又病氣にした處が、さうで、かうして御百度を踏んで居るから、必ず良くなる。と確く信じて居る、その心持だけでも充分直る見込があるのに、かてゝ加へて御百度を踏むといふことが、又た新しい空氣を吸ふとか、適當な運動をするとか、何とかいふ間接の効力を與へる。といふやうな事もあ

らう。大概の祈願や、まじない等のことは、かうした氣の持ちやうからと、旣々、色々それに附隨した、それ〳〵に、心理的又は生理的道理のある事柄とに因つて効果が現はれるのである。それで、必ずしも鰯の頭に限つたことはない。何んでもよいが、鰯の頭は安つぽい物であるから、拜むものは、どんな物でもよい。といふ意味を適切に表徵するのに都合がいゝので、それで斯くは言ひなしたのである。

急がば廻れ瀨田の唐橋

第三　急がば廻れ瀨田の唐橋

吾々が物事について、思慮、分別する。といふことは、已に得て居る記憶や、經驗によつて、現在又は將來を類推し、判斷することである。さう

急がば廻れ瀬田の唐橋

して、其の記憶や經驗の感想やらは、平靜で居る時は、何れのものでも、必要に應じて、―― 但し、元より觀念聯合の法則によつて、公正に呼び起されて來るものであるけれども、心の急く時とか、感情の一方に偏し、昂奮して居る場合などには、とかく、それが不充分であり、亦偏狹であるものである。ところが、急くやうな時には、氣分感情も、矢張り亦、偏頗であり、隨つて多少昂奮して居るものである。であるから、どうしても綿密、周到な思慮、分別が出來ない。そこで、さういふ急ぐやうな場合には、先づ強いて物事を中止するか、却つて、故らに口を緘し、手足を動かさずして、坐禪でもやつて居るやうな積りで、じつとして心の平靜になるのを待つて、初めてやり出すべきである。さうすると、結果に於ては元より善く、道程に於ても亦誤りなく行くものである。そして時間も、決して思

つた程にかゝるものでなく、どうやらすると、氣ばかり急いて、やつたよりは、却つて早く行く位のものである。で、『せいては事を仕損じる』といふのと同じやうに、かういふ諺が出來たのである。

第四　大男相當に智慧が廻りかねる

大男相當に智慧が廻りかねる

智慧とは、廣い意味で、感覺すること、知覺すること、觀察すること、推理し判斷すること、想像すること等、すべての心の活らきを指して言ふのであるが、特に觀察、推理判斷等高等なる心の活らきを代表的に云ふのである。或は「頭が廻らぬ」とか、「頭が活らかぬ」とか、云ふのと同じことである。大きな男は必ず智慧が廻らぬ。といふことは無く、又さういふ

大男相當に智慧が廻りかねる

理窟もない。が、若しかういふことに意味を限つて見るならば、卽ち、身體の大きな者は概して動作行爲が鈍い。といふことならば、それは事實である。又理窟もある。といふのは、身體の面積や容積が大きい割合に、腦髓が大きく又發達して居れはよいけれども、さうはいかぬ。どうしても、身體の小さい者に較べては割合に腦髓の方が小くもあり、別に發達もして居らぬ。所が、身體が大きいと、自然、腦髓や、脊髓などの方に廻はるべき血液の供給量が、身體に比較して少くあり、或は遲鈍になる筈である。然るに、神經活動は結局血液の活動であるから、隨つて、その活らきによつて末梢神經を動かし、四肢の筋肉を動かすなどのことが敏活に行きかねるのである。そこで此の理を、更に推し進めて、身體の大きな者は、腦髓へ廻はる血液の量が身體の小さい者のに較べては

割合に少ない、或は廻り方が鈍い。ところが、心の活らき――特に智慧の活らきは、卽ち此の血液の活らきであるから、それでかやうに大男は智慧が廻りかねるのである。と云へば言はれる。論理に誤りはない。併し事實は、直にさうと承知しかねしめるし、又微妙極まる心的現象や、理法のすべてを、さう無造作に解釋し切ることは出來ぬ。

第五　神は正直の頭に宿る

神は正直の頭に宿る

此の意味を、吾々が正直に働らいて、惡い事さへしなければ、何日の日にか、遂に富裕な暮しが出來る、立身出世をするやうになる。といふやうな風に解するなれば、それは餘りに素朴的な、單純な考であつて、世の

神は正直の頭に宿る

中のことは、決してさうは誂へむきに行つて居らぬ。若し幸にさう行けば、それほど結構なことはないので、誰一人り喜ばぬ者はあるまい。理想的には皆さうあらしめたいと思つて居る。けれども、實際に於ては、或は生理的の理法だとか、或は經濟的の理法だとか、其の他色々樣々の法則が行はれて居つて、それら全ての總合關係の結果として、或は豐富になることがあれば、或は貧賤になることもある。其の他千種萬樣の生活狀態が生じて來るのである。であるから、さういふ客觀的の幸、不幸を、單に一方面の理法に過ぎない、道德的原因にのみ依つて律して行かうとするのは、甚だ無理な注文である。たまには、他の理法や條件がそれに伴隨して好都合になつてくれた場合には、丁度いゝ具合に行くけれども、いつでも、必ずさう行くとは限らない。それ故に、此諺が若

神は正直の頭に宿る

し果してかう云ふ意味の表現として出來たものとすれば、それは寧ろ單に希望として起つたものと見るより外はない。此のやうに道德的理法の他に、色々の理法や條件があつて、正直な、善い人が、事實なか〳〵仕合せな暮しをすることが出來ず、どうやうすると、それが爲に、却つて貧しい暮しをせぬければならぬ。といつた樣な風になつて居つて、どうも吾々の心に不快の念と、不安の感とを與へる。で、せめては、さういふ風に行けよかしとの希望、理想を誰もが畫く。といふところから、斯くは言ひなされたのであらう。所が、若しそれが、單に主觀的の意味とするならば、卽ち正直な、美しい心の者でありさへすれば、縱令ひどんな境遇に遭遇しやうとも、如何なる不幸な時に際會しやうとも、決して恥ぢ恐れるといふことなく、歎き悲むといふこともなく、實に泰然として、

心靜かに、いつも平和な生活をすることが出來る。眞の意味に於ける幸福な生活をすることが出來る。といふことであるならば、それは元より道德的のことであり、心理的說明が出來ることである。一體吾々が、最も勇氣を出し得る時は、吾々が最も深く信ずる事に對しての時である。さうして吾々の最も深く信ずる事は、心に一點の雲翳なく、疾ましいことの無い事である。日常生活の前後左右に於て、亦何等矛盾のあるではなく、私心、邪念といつては露ほども無い、さながら神、佛の如き人であつたならば、卽ち一言にては、至誠の人であつたならば、其人こそ實に幸福な立派な生活をする人である。神は當然其の人の頭に宿るべきである。否な、其の人自ら神なる生活をして居るのである。「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん」とは、さういふ人に於

てこそ初めて言ひ得らるゝのである。抑々、神といふものは、吾々の心の奧底に潛む所の、眞の吾の要求である。何等、うそ僞りのない、隨つて又何等、不安のない、實に徹底した理想的吾の反映である。であるから、若し吾々にして玲瓏玉の如き美しい心になることさへ出來れば、吾々は何時でも神の玉座に着くことが出來るのである。鬼を出さうと佛を出さうと畢竟吾々の心のまゝなのである。そして、其の順序として、は先づ、第一に私心を去つて仕舞ふことである。私心さへ無くなるならば、本心は常に公明正大、亦何等虛僞りのないものである。虛僞りのない世界に、亦何の恐怖不安があらうぞ。神は卽ち吾がものである。これ、斯ういふ諺の起つた所以であらう。

第六　勘違ひする

吾々は、時としては勘違ひとか、思ひちがへとかいふことをするものである。例へば、甲の書物も已に出來て居る、乙の書物も亦已に出來て居る。甲の書物も知人に送呈しやうと思つて居る、乙の方も亦さうしやうと思つて居る。けれども、甲の方は、百部も二百部も、幾らも澤山あるけれども、乙の方は、たつた五十部しか無い。といふやうな關係に於いてある時に、さて愈々、誰か書生に命じて、今日は先づ乙の方を、誰彼、々々に送らさうとかう思つて、自分自ら名宛の貼紙を、熱心に書いて居る。實は、早くに、もう五十人は書いて仕舞つて、尙ほ書きつゝあるのは全く餘計な物である。といふことに全く氣付かずして、頻りに、書生に、早く

此等も送り出さぬのか。と催促して居る。すると、書生は、もう皆送り出して仕舞ひました。一部も殘つてませんと言ふ。そんなことがあるものか、あんなに澤山製本さしたものを、何言つて居る。とやかましく爭つて居る。書生はそれとは知らず驚いて居たが、ひよつと氣がついて、あ、それは甲の方です。甲の方なら、まだ一部も手をつけて有りませぬし、澤山有ます。といふと、爰に初めて自分も氣がついて、あゝ、さうさう、自分は一圖に甲の方だとばかり思つて居た。全く勘ちがひして居た、思ひちがへて居た。といふやうなことがある。これは、甲、乙兩方とも製本が出來てあるといふと、何れも知人に送呈したいといふこと、此の二つの共通した事柄が、しかも、つよく頭を支配して居て、その違つて居る點、卽ち一方は二百部以上も澤山あつて、一方はたつた五十部し

か無い。といふことは、比較的に弱く、記憶して居つたからである。かういふ錯誤について、更にそれよりも、もつと強い原因を爲すことのあるのは、之と全く反對で、何かの具合で、甲の部數と乙の部數とを全く取り違へて居つて、それが潜在觀念となつて居て、絶えず頭を支配しやうとする傾向があり、顯在觀念の明かでないやうな場合に、ひよつと、機會を目つけて活らき出す。といふやうなことである。

第七　疵もつ足

吾々の筋肉には、隨意筋と不隨意筋とあつて、其の不隨意筋の中に、絶えず活動して居るものと、さうでないものとある。例へは、肺臓、心臓、又

は腸胃等の如きものと、永年の間、習慣や遺傳によつて、何等か或る刺激を受けると、別に、心で、どうしやう、かうしやうと思はいでも、自然と、活動するもの、例へば不意に石が飛んで來たり、極めて強い光線が出て來たりすると、思はず識らず、目を閉ぢたり、或は道行く時に、何か、ひよつと柔かいものを踏んだりすると、何時か識らず、足を上げて居る。といふやうなことや、又は、何か恥づかしい事に出くはすと、自然と顔が赤くなる。といふやうなことがある。それであるから、若し吾々が、何か非常に心に感じたことだとか、二六時中、絶えず、きつく心に思つて居ることだとか、いふやうなことがあると、それが、かういふやうな、本能的又は反射的な作用と結びついて、無意識的に行動云爲に表はれることがある。それで、何か悪いことをして恐れて秘して置くことなどがあると、さうす

ると、それが事にふれ、折に觸れて、ひよつと、其れと悟られるやうな事を口ばしつたり、何となく落ち着かぬ擧動をしたりするものである。で、その疑ひを避けやうとして、內心、非常に注意、警戒する、けれども、すればするほど、却つて他人から覺られるやうな具合になつて、終に罪惡が露顯するやうなことになるのである。

第八　氣で氣を採む

何か心配な事があつて、かれこれと考へ初めるといふと、最初の間はさ程になくても、それが幾度と度重なつて來ると、もう其事は考へないで置かうと思つても、何時の中にか、復た同じことを考へ出して居る。

といふやうなことがある。それは、物理界に惰性といふことがあるやうに、心理界には亦習慣性といふものがあるからである。それから又、或ることを深く心配しかけるといふと、それに關係があり、似よつたことが、それからそれへと、次第々々に澤山思ひ合はされて來るものである。といふのは、吾々の心には、觀念聯合といふ法則が行はれてあるからである。そして尙ほかういふことがある。かやうな心配ごとがあつたり、不快なことがあつたりする時は、何となく氣分が面白くなくて、見ること聞くこと、何んでもがすべてものうく、うるさく感ぜられるものである。之を感情の類化といふのである。そこで、吾々が何事か、氣にかゝることがあつて心配し始めるといふと、此のやうな、三つの心理的傾向が相互に結びついて、おのづから非常に氣を採むやうになるも

のである。そして、已に一旦採み出すといふと、いよ〳〵益々盛んになつて、何か、そこに非常な變つた出來事でも起つて、心機を一轉さすやうなことでもなければ、遂に留めどもないやうになることもあるのである。こゝの氣といふのは、今日の言葉でいへば、先づ氣分とでもいふべく、一般感情に相當するが、實は、元より觀念も含んで居るのである。それで、要するに、觀念の習慣性及び聯合性と感情の類化とによつて起るところの心的現象を、かくは、氣で氣を採むといふのである。

第九　子ゆゑの闇

自分に利害關係の無い事に就て、知識が足りないで分らぬとか、理窟

が分らいで判じがつかぬとか、いふやうなことは、それは單に分別が出來ぬ。といふだけで誰かに教はつてもよく、決して迷ふなんていふことはない。所が、それが自分に利害關係のあることであると、なか〳〵さう單純にはいかぬ。どうの、かうのと、多少迷惑するのは普通の人情である。特に、親が其の子に關して、何事かを考へたり、思つたりする時には、それが最も甚しいのである。といふのは、大に利己的、自愛的感情が活らくからである。どういふ物事に對してゞも、全く感情の活らかぬといふとは決して無い。けれども、さういふのは純粹で、公平である。が、假令ひつまらぬ、一寸とした物に對してゞも、それが自分のものであるといふと、微塵も自己感情を動かさずに居る。といふことは、先づ大抵の人には出來ぬ。況んや、それが自分の子――第二の自分に對して

子ゆゑの闇

であれば、とても出來ぬ。普通は大に動かすものである。なか〳〵第三者の見方は出來ぬ。そしてかやうに、感情が多大に活らくものとすれば、感情は本來盲目的のものであるから、少からず冷靜なる觀察、思考を妨げるものである。たゞ自分と自分の子供について都合のよい觀念のみ、頻りに聯合し來りて、餘他の觀念は、殆ど全く仲間入りするとは出來ぬ位優勢に活らくものである。であるから、考察、判斷が、とても公明にいく筈がない。他の子供と爭鬪した等の場合には、自分の子供の方が正しいやうに思はれたり、又何か、其子の一身上の將來を考へたりするやうな時には、入らざる餘計な心配までもしたり、或は考へ及ばなかつたりして、とかく過、不及勝ちなのである。「人の親の心は暗にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」とは蓋し此間の消息をもらしたものであらう。

子を持つて知る親の恩

第十　子を持つて知る親の恩

此の『知る』といふ意味は、認識とか、理解とか、いふやうなことではなうて、と同じやうに感ずる、と同じやうに味はう、といふやうなことである。卽ち情的經驗から寄する所の、矢張り一種の同情である。どんな事でも、一旦自分の出遇つたこと、經驗したことでないと、本當の同情は起るものでない。わかるものではない。所謂『吾が身つねつて他人の痛さを知れ』である。それで、子を持たぬ人、卽ち親としての經驗のない人は、親が如何に子を思ふものであるか、親の子に對する人情は果してどん

子を持つて知る親の恩

なものであるか、といふことが決して能くわかるものでない。學校で修身の話を聽いたり、又人に話されたりするものであるから、知識としては知つて居る。けれども感情的にはわかるものでない。未だ子を持たぬ人が、よく言つてゐる。『あんなにも可愛いものかしらん』と、無理ならぬことである。所が、さう言つてる人が兒を生んで見ると、次第々々にそれがわかつて來る。糞、小便の世話から暑い寒いの氣遣ひを初めとし、其の他修學、職業などについての勞力、心配に至るまで、竝、大抵のことではない、とても、他に比較になるものはない。終には『成る程』とよく分つて來る。と同時に、自分の小さかつた時に、やはり斯ういふやうに、親が可愛がつてくれたのである。大きく成るまで萬事深切にして呉れたのである。といふことが思はれて來、隨つて、親は實に有がたいもの

のである。その御恩は實に海よりも深ければ、山よりも高いものである。と、眞の味がうなづかれるやうになる。諺の起つた所以である。

第十一　悟りが早い

悟りが早い

此の悟る。といふのは、細かく云へば、幾樣にもなるが、先づ、大體に於て二樣になる。一つは、理解の意味である。一つは直覺する、感ずる。といふやうな意味である。一體、吾々が物事を見たり、聞いたりして、之を理解するといふことは、豫ねて自分の頭の中にある經驗、知識によつて之を類化したり、又は之れを辨別することである。であるから、能く理解する人は多く知識あり、多く經驗のある人である。そして、それが

悟りが早い

早いのは、さういふこと若しくは、それと同似のことの理解を、已に幾度も幾度も繰り返して居るからであるか、或は先天的に、或は後天的に、さういふ習慣、傾向のある人かである。それから、其の直覺するとか、感ずるとか、いふ方のは、かくの如き理解に伴つて起る所の情調又は氣分の側である。似たりよつたりの經驗を幾度も幾度も、數限りなく積んで來た人は、比較とか推理とか、いふやうな複雜な手續を經ることなくて直に、それと悟られるものである。即ち同じやうな認識や理解の時には、必ず自ら同じやうな情調や、氣分のするものであるから、絶えず繰りかへされた物事、或はそれに類似した物事の、一寸とした感覺的刺激を與へられると、その性質上、電光石火、極めて早く、アッと感動して悟るものである。それで、此の悟りの早い。といふことは、結局さういふ習慣

や傾向やが、先天的若くは後天的にある。といふことを意味するのである。

第十二　死ぬる子の見目よし

死ぬる子の見目よし

これは、丁度「憎まれ子、世に憚かる」の反對で、實に見目のよいやうな、顔形の美い兒、惜しがられるやうな兒なればこそ死ぬのである。とかく、容子のよい、怜悧なやうな兒は、概して夭死するものである。ところが、人は普通、さうは思はないで、死んでから初めて、驚いたやうに、なるほど、早く死ぬやうな兒で美しかつた、賢こかつた。などゝ、頻りに惜しがるものである。それから又かう云ふこともある。大人でもさうである

死ぬる子の見目よし

が、生きて居る間は、彼れ是れと惡く言つた人でも、さて死ぬといふと、さうはいはぬ。却つて、何とか彼とか褒めるものである。況んや、それが普通の人であり、若くは、多少善い人でゝもあらうものならそれこそ大變で、口を極めて惜しがるものである。といふのは、一つは、大體に於いて、さやうに噂をされるやうな人は、大なり、小なり、間接にか直接に、自分に利害關係のあるものであるし又人は負けぬ氣のあるものであるから――自分若くは自分の子供等に較べて――それで、生きて居る時に、有のまゝに賞讃しがたいものである。が、死ぬといふと、もはや、さういふ關係が無くなる、少くとも餘程薄くなるから、そこで、初めて公平に批評し、褒美するやうになるのである。又、今一つは、吾人は、過去や、又は未來の物事に對しては、或は目に見えぬ物事に對しては、とかく之を理想

化したがるものである。それで、普通の人は大抵は、より善又はより美になるものである。況んや元と〳〵多少にても、より善又はより美であつた人は、死んでから後に大に賞美せられるやうになるのは勿論である。そこで、かういふ諺も起つたのであらう。

第十三　十分は溢（こぼ）れる

十分は溢れる

月は滿ちては缺け、滿ちては缺けして居る。鉢や盆に、十分に水を入れると溢れる。それと同じやうに人間の事も、十分といふことはいかぬ。何か彼か、其處に缺陷が出來る。どの人にでも何か言ひ分があり、何れの家にでも、色こそ違へ、面白くないことのあるものである。十分